

主幹。麻生路郎

川柳新誌

十一月號

昭和二年十一月一日發行
第三卷第四十一號
每冊一角五分
全年一元二角五分

川柳雜誌 第四卷 第十一號

川柳雜誌社發行



どん
ねく
こころ

「週刊朝日」

懸賞 文藝大募集

柳「松の内」

選者麻生路郎氏▽一人一句官製ハガキ使用の事▽大阪市北區中之島三丁目大阪朝日新聞社内週刊朝日懸賞文藝係宛▽入賞第一席(參拾圓)第二席(同貳拾圓)第三席(同拾圓)佳作數十名(薄謝)▽締切十一月五日限り▽發表週刊朝日新年特別號誌上

▼注意 川柳と俳句と期せずして同じ題で募集された事は興味が深い、整理の際まぎらはしいので必ず川柳と朱書の事

十一月例会

- ◇日時 十一月三日午後六時三十分
- ◇場所 大阪市南區清水町停留所西入端の坊
- ◇兼題 「噂」三句
- ◇會費 貳拾錢

各地支部増設

本社に川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。柳界のため且又「川柳雜誌」のため、眞面目に支部幹事を引受け、極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやうかいふ川柳家は、本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌 第四卷 第十一號 目次

感想・評論

鳴り皮 岩本素人
森の家君の句境 安川久流美
一讀即感 西原柳雨
三人の亡友 庄萬よし

研究・其他

柳壇 評釋 廿四篇まで(八) 麻生路郎
ビイドロミギヤマン 木村半文錢
遠目鏡の見料 喜田飯山
煙草の古句 蛭子省二
東奥の佛都(二) 三井與之助
主婦の杓子權 藤里藤園
川柳累卵の遊び(七) 柴舟講評
漫畫 累卵の遊び(七) 柴舟講評
古句質疑 蛭子省二
山上山下 富士野鞍馬
仙境層雲峽 富士野鞍馬

▲募集句

和尙 蛭子省二選
末の子 喜田飯山選
夫婦 二福不二柳共選
松雨追悼句會 橋本二柳子記

各地柳壇・川柳書架
ごんたく(表紙)

題字
編輯室から

創作

作

川柳塔 吉田清生
酒井駒人 小出愴重
庄萬よし 路耶生
横田眠聲 麻生路郎
中澤濁水 酒井駒人
奈良井仙坊 庄萬よし
尾添雷相 横田眠聲
安井ひろし 中澤濁水
西本三笑 奈良井仙坊
安西杏三 尾添雷相
岩崎柳路 安井ひろし
本田柳一路 西本三笑
川合舟々 安西杏三
橋本二柳子 岩崎柳路
長崎柳秀 本田柳一路
紫谷柴舟 川合舟々
諸家



近作柳樽

路郎

選

信心に嵐のなかをまつしぐら
 そんな過去あつて恵むと知られたり
 翌日にだませばもろき母であり
 算盤へ置く成程要りまする
 小鳥飼ふ趣味が高じた家になり
 白粉をつけて五十を晒らして居
 秋風に岐阜提灯の蠟をこり
 氣晴しにくるおんなじ事を演り
 愛兒を失はれた知人へ

女湯で亡くした子供たづねられ
 當らなきや賣る債券妻に見せ
 印税で育てる母に父のこご
 反響を見に編輯部ブラリ出る
 おさなしい裸覗けば臍のゴミ
 謹んで告げて銀行まだ休み
 花道の傍で毛驢を憎く見る
 土工部屋バットも切れて雨を見る

大 阪

鮎 美

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

東 京

同 鳴 穂 堂

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同



嫁が来てからの不吉のやうに云ひ
 鐘一つ目を曇らせる一心寺
 熊はんの羽織が目立つ投票日
 笑はれに出るのに銭が少し要り
 先生に問はれて親は嘘をつき
 恵まれぬ親類筋で仲が好し
 待てば来ず行けば今出たまご云ひ
 子澤山一人呼ぶのにみんな呼び
 紅茶だまきけばなる程紅茶なり
 ヴエランダへ南國めいた月がさし
 夜の海はるか彼方に灯がさもり
 酸性の笑刀を拭ふ時
 蜂蜜をとかしたやうな舌を持ち
 涙すゝりながら夕日へ寂しい子
 むつゝりさものをいはぬは船に酔ひ
 捨てられた女のやうに野のボスト
 熱愛の遂に脅迫じみてくる
 白足袋の忙しさ何か抱へて居
 窓しめて出納係留守にする
 口入屋巡査の口調にもなつて
 遠乗を見てて散歩に閑がいり
 日の丸の折目正しく古びて来

同 同 同 同 神 同 同 同 同 同 松 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

三 戸 江

同 同 同 同 嶺 同 同 同 同 同 同 町 同 同 同 同 同 同 同 源 同 同 同 同

月 二 坊



故郷を思ひ出さした今日の雨
 行水の加減はすれも子は居らず
 金錢の奴隷となつて肉までも
 肉襦袢酒に眼のない父があり
 見習を連れて給仕の眞面目振り
 留守宅が一人淋しい稲光り
 何氣なく刑事話を聞いて居る
 手にあごをのせて行く汽車眺めてる
 鋸を貸すも少しく歪めて來
 境内を抜けて水車の水が落ち
 家移りを隣が先に淋しがり
 女親吾が二の舞をさせじとす
 狐壽司話する間に山に盛れ
 此勞働に此報酬はちも寂し
 ランニング我が子の顔が見當らず
 二等室妾一人で恐ろし
 猫いらすなほすもころにさてこまり
 さばかりの事にも娘よく笑ひ
 灯を消して虫の聞聲く許婚
 一ツづゝ齡をまつてる命がけ

小松 尼ヶ崎 兵庫 輪嶋 大阪 石川 小松 同 大阪 盤ヶ池 和歌山 兵庫 大阪 堺 輪島 金澤 大阪 盤ヶ池 尼ヶ崎 石川

竹 二期 吉 朗 郊 村 惣 陀 樓 突 起 坊 松 水 同 夢 醉 政 玉 仙 玉 香 子 芳 香 子 さ 舟 太 路 香 雅 子 綠 浪 靜 秋 昭 郎 二 水 花 堤



柳 評
釋 樽
廿 四
篇 まで
(八)

麻 生 路 郎

(四) 二 篇

家内喜多留二篇の發行年月は不明であるが、初篇が明和二年に刊行され、三篇が明和五年に出てるころからみれば、二篇は三年か四年かに刊行されたものであらう。

(五) 二 篇 の 句

此部屋に一人寝ますと氣をもませ

若後家の心境を剽切に擷んだ句。「若後家の剃りたいなきこむごがらせ」の句と對照して味へば更に面白と思ふ。此の部屋といひ、一人寝ますといふ女の言葉が有心か無心かは知るよしもないが、誘ふ水あらばいなんごと思ふこいふやうにも受けられるのである。たこへそれが不用意に出た言葉であつたにしても男のこころは亂れずにはゐないのである。

旅立は二度めのさらば笠でする

別れの言葉を一人々々に交してから、草鞋の紐をひき締た。

「留守中は家族が無事息災でござりまするやうに」心のうちに念じながらも早やあぜの曲りかきまで來た。さうもろこしの葉に書をさびしく鳴く虫の聲がする。これでしばしの別れだと思ふこ、何もなく後髪ひかると思ひがして、ふりかへれば、我が家のかきに妻も子も茫然としてたすんでゐる。今ならば白いハンカチでも振るころを笠が別れのシグナルなる昔さながらの情景である。

はかまかき隣のていしゆ聞に來る

慶弔いづれの場合であるかは不明であるが、兎に角、袴で出かけたものか、それとも袴をつけずに縮もので行つたものか迷ふた結果まあお隣並にしておけば間違ひがなからうと相談に來るこいふ、ありふれた心理を事もなげに擷んでゐるころにこの句の妙味があるのである。軽い穿ちの句だ。平凡な人間とい

ふものは割に弱いもので同じてれくさい目にあつても一人でも二人でも連れがあれば氣強く感じるものなので斯くは隣ミ歩調を合はさうとするのである。

茶屋斗深みへ行くを知つて居る

「こんなことをいふ花魁は、氣を悪くするだらうが、決して氣にかけしおくれでないよ。たゞ花魁の身を案じるからだよ。そりや何んでもないこなんだが、あの大盡のこころさ。もう、あまり永いこころはあるまいと思ふのだよ、だからさ。身を入れ過てるるさ、飛んだつびきならぬ破目にならぬさも限らないよ」これが花魁に對する茶屋の異見なのである。金の有難味をあまりに知りすぎてる茶屋のこころである。花魁までが深みへ落ちてゆくのを決して見遁しはしない。

吉原へてんねき配る十七屋

吉原へは、たま／＼しか飛脚かこごかなかつた。よく／＼のこごでなければ女郎の國元から頼りが來なかつたこごが想像される。それだけに、てんねきに配る手紙が、ごんなになつかしいものであつたかを窺ひ知ることが出來やう。向さしては上乗なものではないが華やかな吉原の半面に斯した淋しい境地のあつたこごを知つておくのも無駄ではなからうと思つて加へておいた。てんねきは「たま／＼」同意語で今も武藏の秩父邊では使つてゐるさうである。十七屋は飛脚屋をいふ。十七夜を

立待月さいふさころから托した手紙が忽ち着き酒落ていつたのが飛脚屋を十七屋ミ稱するやうになつたのである。

松の内 麻上下の袖だゝみ

さうせ明日も又着るのであるから云つて、麻上下を袖だたみにして衣桁にうちかけたのを見て、そこに軽いユーモアを感じたのである。松の内としてはありさうなこごである。麻上下のやうな儀式張つたものに袖だたみさいふザツクバラんなこごが、あまりに不釣合だからである。一篇には、まだ

寢せ付けて亭主とかわる松の内

こいふ句がある。女房がかるたあそびでもするのであらう。流石に春らしいのんびりしたこごがあつて面白い。

松の内は注連の内さいふ。正月の十五日までの事である。

本ぶくの元のごごくにしわくなり

人間が人間をのしる聲である。

各いので有名な何屋何兵衛さんも、さて重患に罹つて見るこご永年稼ぎためた財産が何んのたしにもならぬこごを知つた。いくら財産があつたからして持つて死ねるものでもなし如何にも悟つたやうな氣になつて是も遣りやう、あれも遣りやうと思つても見、又云ひもしてゐたがさて癒つて見れば、塵一本でもくれてやる氣にはならぬのが人情、殊に爪に火を點すやうにして貯めたものをさうむざ／＼は渡されぬ、可愛い子であらうさ、血

をわけた兄弟であらう。金にかけては他人も同然。ここまでなつてくるのを嘲つた句である。穿ちもこゝまで来る。痛烈骨を刺すではないか。

本ぶくのびくには結つて見たくなり

永い間病らつてゐた比丘尼の病がすつかり癒へた。寝てゐる間少しも剃らなかつたので髪の毛がいつのほきにか結はれるだけの丈になつてゐる。又剃つて元の青々とした頭になることが何んだか口惜しいやうな氣もする。いつそ此のまゝのぼして鬘に結つて見たい氣もする。それは佛に仕へる身にまつて詮ない希ひである。詮ない希ひである。こゝは知りすぎてゐるが、斯して自然にのびて來た髪の毛を眺めては無造作に切つて捨てる氣にもなれないのである。そこが女の情である。

きしばかりこがせたがるも女の氣

あふた日を覺て居るが女の氣
屁の論に泣くのもさすが女也

「きしばかり」も「あふた日を」も女の氣の小さいこゝを諷してゐる句である。「屁の論」に至つては同じく氣の小さいこゝを諷してゐるには違ひないが滑稽味を漂はせてゐる。こゝろに作者の手腕が出る。屁こいふやうな下かかつたこゝを詠んでしかも、それほど汚ない感じを伴つて來ないのも妙である。

去り狀の跡へ紺屋が出かして來

女房が、染めにやつてあつた品が、離縁になつてから後に出來あがつて來たこゝを詠んだものである。紺屋さいふものはさう期日通りには仕事を運ばない。つひのびくにしてゐる間に片方では夫婦別れて去り狀を出してしまつた。夫婦喧嘩さいふものが、ごて／＼いひながらも、さう簡單に片づかないものであるが、その時のあかない夫婦喧嘩よりも、紺屋の仕事の方がびく／＼になつて去り狀も渡してしまつた。この句からうけるあけて來たそののんきさを諷したのである。この句からうける印象はさうした紺屋のあさつてよりもその出來て來た品に對する夫のこゝろもちがひはれる。未練のある夫だ。こゝろは出來上つて來た女房の注文品にもさびしさなつかしさのこんがらがつた感じが湧き出たに違ひない。

禿から目にもろくのつみを見て

歡樂境の吉原は一面罪の世界であつた。禿は禿になつた小さいころから、見まいさしても、目にもろ／＼の罪を見て來た金を持つた男の横暴さ、金持たぬ男の塵芥や犬猫にも劣つた扱はれ方、賣れぬ花魁の生きながらの地獄の責苦、金の切れ目が縁の切れ目をあまりに、はつきり見せつけられて來たのである。泥中の蓮であるこゝを禿にのぞのは、のぞむ方が無理である。

寂しい句。

姑のひなたをほつこは内を向き

姑しよいふものが嫁よめにまつて一敵國いっていこくであるこは今いまよりも一層いちじやう甚はなはしかつた。ひなたほつこをしてゐても内うちの方かたを向むいて嫁よめの行動こうどうを監視かんしするこを怠おろそかなかつた。嫁よめのこゝろが自然しぜんに石いしのやうに堅かたく暗くくなつて行くのも無理むりは無い。同じ二篇にへんに見ぬ顔をすれどちよつちよみ針はりが止とむ

こいふ句があるが、これも針仕事はりしごとをしながら嫁よめいぢりをしてゐた姑しよの態度たいどを穿うつたものである。昔むかしのお嫁よめさんたる又難またいかなである。

右々みぎまミ 麥むぎから 顔かほを出だして いひ

田圃たのぼ道みちが二つに岐よれてゐるこころまで来て旅人たびじんは立ち止とつた。

ふりかへれば一二丁いちにじやう後の青々あおぞくとした麥畑むぎはたけから、さつき道を教おしへてくれた百姓ひやうせうが顔を突き出だして「右々みぎま」ミ手を振りながら叫こゑんでゐる。空そらには雲雀うんせうが鳴ないてゐたこころであらう。

手一本ていっぽんなくしてかゝるぬいはく屋

このころ斯かうした情景じやうけいに接せつしないが、こごもの時分じふんには三越さんせつの横よこや三林橋筋さんりんはしなでよく見かけたものだ。寫生句しやせいこで一寸いちすんした穿うち。

じゆず袋ふくろよめけいはいはくのはじめ也

嫁よめいぢりミ寺てらいぢりが昔むかしの姑しよの主なる仕事しごとであつた。嫁よめにまつては、むづかしい姑しよが寺てらいぢりをしてゐる間まが極樂ごくらくであつた。

お寺詣りの留守中るすちゆうにはほんにほがらかな氣持きもちになつた。年としを老おいつては後生ごせうが一番大切いちばんたいせつだからミ、それミなくお寺詣りをすゝめた。いかにも親切しんせつさを見せるかのやうに新し珠數袋しゆすうぶくろを縫ぬふて進すすんだ。

が、その親切しんせつは心こころからの親切しんせつではなかつた。底そこの底そこには美しい薊あざみがあつた。早く死しんでくれたらミ思おもふ嫁よめのこゝろに過ぎないミ呪のろんだのが、この句このこゝろの作者さくしやの觀察くわんさつである。穿うちの句。

すけ笠の内へ帯おビミくまこも刈

眞孤まこもを刈かりるのには、泥深ぬいふかい水みづの中なかへ這人はいじんらねばならなかつた。そこで身仕度みじたくくのために帯おビを解といたが、さてその帯おビのやりばがないこころから被かぶつてゐた菅笠すががさを脱ぬいで、その中なかへ帯おビや着物きものを置おいたのである。

スケツチの句。

去いつたあす物を探たづすにかかつて居

昔むかしから男おとこは、家の事いへことに、こせくするものでない云いはれてゐた。また外部ぐわいぶのこゝに草臥くたがれて家のこゝまで氣きを配はるこゝは事實じじつ不可能ふかうでもあつた。だから何處どこに何なにが置おいてあるのか女房にやぼうがあるなければ少しも様子ようすがわからなかつた。たま〜女房にやぼうミ夫婦ふうふ別わかれをした。その翌日あしたのこゝである。さあ困まどつた。手拭てふき一本いっぽん紙かみ一帖いってつからして何處どこに仕舞しまひ込んであるのか判わからないので探たづがし廻まつた。穿うちの句。(續つづく)



ドロー
ギヤマン

ギヤマン

(下)

—附フラスコと丸山—

木村半文 錢

丸山でかゝミのないも稀に産み

(明和)

蘭説辯惑で磐水の弟子の元兇か「和蘭人は犬實跟なし云ひ
或は眼目も畜類の如し云ひ、或は彼人長大なりさいふ。實に
然らや」ミ問ふてゐるのに答へて曰く。

「跟は一身の基立する所、跟なりして何を以て起行すべきや論
ずるも及ばぬ事なり」ミ明断を下してゐるが、當時の風評には
「紅毛人は跟がないミ傳はつたものに相違ない」恐らくは素足
を見せぬ靴や沓下からの憶測であつたのであらうミ推察される
殊に當時の紅毛人が血氣壯いものが多かつた關係上ミ、カビ
タンにして五十以下の人があつたらしいので「蘭人はみな短命
なり」ミ噂をしたミ傳へたのであるから、丸山の遊女にも跟の
ない混血兒を生んだであらうミ、當時の川柳子に想像せしめた
のは、あながちに荒唐無稽でもなかつたのであらう。例の翁草
にも「總て其國のおく天壽にて五十歳までは生るは稀なり」

ミあり、以て其噂の一つミしやう。

序に斯うした丸山遊女に就ては正徳五年度にお達しが出てゐる
「遊女オランダ人之子を懐妊之候は、早速是を申出べし、隠置
後日に令露顯者其遊女並主人西町乙名(註、乙名は長崎各
町に置かれた其の町の總取締役)まで急度爲曲事候事」

ミあり、多分「跟のない」「天折」の子供を産むことを忌み嫌
ふて、若しもの時には非常手段を講じてゐたものらしい。それ
を慮つて此の布告が發せられたのであらうミ思ふ。この不

可思議な交情を結んだ紅毛人ミ丸山の遊女ミの關係に就て、長
崎市史で其の遊興の統計を擧げてゐる。これに依るミ、享保十
七年正月元日より同年十二月廿九日までに、唐人屋敷へ入つた

遊女數の延人員は二萬四千六百四十四人であり、阿蘭陀屋敷へ
入つた遊女の延人員が三百三十九人ミなつてゐる。亦、元文二

年正月元日より、同年十二月晦日までに、唐人屋敷へ入つた遊

女數が一萬六千九百十三人で、この代銀が八十四員六十五匁、阿蘭陀屋敷へ入つた遊女の延人員が七百二十人で代銀十八員七百目を支拂はれてゐる。以て、丸山遊女の實收の宜さが窺はれやう。又、斯うした丸山遊女の揚代金が現金で渡された時もあるが、多くは砂糖で換算されて支拂はれたのであるのは事實だ。遊女がわざ／＼長崎會所に出頭して受け取つたのだが、この風習は紅毛人の抜目がない點で、砂糖で換算すれば確かに格安になる勘定だが、これに立ち會ふところの會所の役員は、(随分さポロイ事をしたのであるが)可なり苦しい役目を勤めさせられたものに相違ない。丸山へはまつて髻で蠅を追ひ」の柳樽初篇の句も恐らくは紅毛人の淫蕩生活を諷したものであらうと思ふ。枕文庫さいふ淫本には蘭人が丸山遊女に致へたべづらホさいふ秘樂のこを詳しく書いてゐるが、例の磐水は「房中の術多くいろ／＼媚藥を施すさいふの類、一向取擧ぐべき様もなき妄談なり」と否定してゐる。然し其の説の當否は私の知る限り非ずだ。だが、寛永七年の別所、久松の兩長崎奉行の意見書の一節には

「殊の外不法なるものに御座候故、人の妻娘と密通いたし前にもこれには種々の表事も御座候様に承はり及び候、旁以て旅宿に差置候儀然るべからず奉存候」

と具陳してゐる。これは唐人といつてゐるが要は紅毛人も含んでの意見書であるのだ。旅店に、處置信儀然るべからずとあるのは、あながちに唐人や紅毛人のみに限らず、吾國人にしても長崎滞在の日數は制限を加へられてゐたのだ。その規定による

こ、所用見物は百日、商用は百二十日、唐、蘭交易品入札は百八十日、藝道稽古奉公は五ヶ年といふ風に規定されてゐたのだ天下の丸山も、斯うして極樂浄土の中には一種の取締りが厳しく加へられてゐたのだ。いづれ長崎に就ては稿を改めて詳説したいと思つてゐるから、本篇では話しの都合上、少し觸れたまですに止めて置く。然し、ギヤマンミビイドロミを書いた以上は當然觸れねばならぬのは例のフラスコであらう。それを一考して此の稿を終りたい。

ふらすこをあげたで息子内に居す
 ならずこはちびりく／＼青くなり
 顔をかくなるさふらすこ青くなり
 (天明) (寛政) (同) (文政)

いづれも狂句式だが、その句の價值は別として、この句を通じてフラソコの無色でなしに着色のものであつたことを知るに足る。蘭學者磐水は「ふらすこは本名ふれすく此方にいふ類のものにあらず、油藥名酒なき納る、硝子器をいふ」を説明して後に圖解し、それに「ふらすこは大小あり、油藥なきを入るゝものなり、惣して硝子器をふらすこいふは、このふらすこのあやまりなるべし」と更に説明してゐる。流石に蘭學者である。恐らく蘭語の硝子器であらうと思ふこの以上は説明の要もあるまい序にコップの句を擧げてみる。漸く文政度の「水鉢の中でこつぶのおよぎ」さいふ寔に愚にもつかぬものを一句探してあてたが、これも特に解説の要もあるまいと思ふので省略する。(完)

附記 柳樽三十篇三十四篇は共に初代川柳翁在世當時の句を輯録せし故その年代不詳に付篇數に因ることにした。



川柳塔

○ 麻生 霞 乃

たこくを見に見せずして彼岸過ぎ
枯尾花 花火をちらす如く也
ざくろのみ赤く燃へ立つ秋なるか
空見れば空に葉刈の音がして
何事も因縁づくの籠の鳥
ふりかざす扇の如く派手にるよ

○ 酒井 駒 人

新店の主人上等兵の服
支那服も又割烹着もよく似合ひ

別荘番今日から廣い庭を見る

○ 庄 萬 よし

あの頃の十八金のピンらしい
智慧熱が出る年ですご母同志
この年になつても女乗り違へ
通學の前垂掛けももう秋だ
聞いて置くこゝが多かつたのに初七日

○ 横 田 眠 聲

人の世話するのが好きで貧乏だ
滑稽な父で子供のよく遊び

○ 中澤 濁水

校庭に落ち付きを見る雨上り
玩具屋は眞ッ赤に見えて灯に光り
また持病薬の切れたのに氣付き
ウキンドへ脱いでるやうに下駄ならび
傘を持ちながら相撲を濡れて見る

○ 奈良井仙坊

世間體いゝけぎ後に金はなし
案外は知らない女まで笑ひ
大阪へ行きたい氣にもなる寢床
金もなく一職工で死ぬるのか

○ 尾添雷相

伯母も又チヨイ〜嫁をいびりに來
石垣が城の堅さを思はせる
利子だけで食へる妾へ人も來ず

○ 安井ひろし

まつすぐに歸ればお茶も沸いてをり

寶塚親父は將棋さしに行き

一面の寫眞はみんな空輪なり

ふじむらの羊羹でお茶をよばれ

御養子ときけばつくづくいやな奴

○ 西本三笑

歸省

我を待つやうに金澤降つてゐる

久しぶり旦那かはつた事を聞き

亡母二十五週忌

二十五年父に未練もなく老いて

○ 安西杏三

右左つけねば衆愚承知せず

看護婦の人生觀ミ云ふを聞き

小父さんと呼ばれて少してれて來る

其象氏退院

退院を送る廊下の遙かなり

粒々集

甲光哉氏夫人

通勤の朝あんまり空が高過ぎて

○ 岩崎 柳路

總本店まだバラックでよく賣れる
 妾宅の水屋から出す花らつきよう
 社長の自宅給仕はメモに書いて呉れ
 不器用に白粉塗つて女房無事

○ 本田 柳一路

一錢の釣にも赤くなる女

○ 川合 舟々

喰べてゐて呉れといふほぎ無いお櫃
 叱られるかと思ふてか寝て仕舞
 人込へ子供力の感じつゝ

○ 橋本 二柳子

人生を罪なものさし死んでゐる
 小作農自動車に乗つてみたくなり
 奉仕する氣もなく丁稚眠いなり
 三人が並び白粉つけるころ

○ 御影 長崎 柳秀

交番所ろくに訊かずに擲りつけ
 先代はずぐに痼癢立てた人
 あたり見てポストへ入れるいゝ手紙
 選舉場菜ッ葉服だの法被だの
 父さんが見ゆるくゝ船へ指

開く所を皆あけて居る夏の家
 オートバイ意氣天を衝く馳けつぶり
 忙しい妓ですゝ女將口を足し
 力なく咳をせく妓の美しく

○ 魚崎 柴谷 柴舟

百舌鳴く日父になるこゝ想ふて見
 お父さんになつたらどこが變るのか
 川柳雜誌社の茸狩に招れて
 さりもせず見事な茸に友を呼び



煙草の古句

蛭子省二

生來煙草に縁なく、敷島の値さへ今に知らぬ自分には、煙草の話は尤も興味のそそられる一つで、紫煙をたなびかせて氣を上げる人を無邪氣に思ふ。煙草渡來の歴史……實は未だ調べてゐない、否其道の本があるう。書架の新村博士著「南蠻更紗」に。

かやうに珍重されるに至つたタバコは、何時頃から歐洲に輸入されたか云ふに十六世紀の半葉時分で、それには色々な考證を要するが、茲には略する、亞米利加の島嶼や大陸に於ける喫煙の土俗のことが知られたのは、コロンブスの發見當

初であつたが、植物を調査したり輸入したりしたのは、それから更に五六年後のことになるわけだ。丁度葡萄牙人が日本に來初めた時分に煙草の植物が歐洲の土地に培養されるようになったのである。間もなく喫煙の風俗がヨーロッパ各地に擴がり、南蠻船によつて日本に傳へられたのは、南蠻人渡來以後三四十年も経つてからであらう。先づ天正年間、西曆の千五百八十年頃見てよからう、植物として傳來は少し後れる慶長十年頃には、煙草もあちこちに移植され喫煙の風も各地に流行した。初めは黒船の商人船

員マドロス等が喫煙するのを見て眞似をしたに違ひない。それが天正時代であらう。煙管もあつたが、葉巻が多かつたようである。

今、私は「目ざまし草」に「狂歌煙草百首」を讀むだところであるから。古川柳二三種へ書添へて置こう。

國府より手さはりのいい三會目惣樂二帖國府の中へおき三會目國府の下に二兩おき五分の國府やみやみ内でのみ四つ手から國府をつかみ出して尋ねるだらうと國府を四手吸ひ棒組は國府にむせて一つ咳き出して來やな三國府を買になり抹香も國府にもふ品の月

品川の客の國府がほんのこまきつゝい國府を柔かにする手管品川のごちよく國府でのみない町内で死ぬ三煙草屋國府切れ三會目薩摩に佐渡をあひしらひ品川關係の句は國府で薩摩侍を現はしたものであるが、上品は大隅産で、下品は櫻島産俗に島國府云つた、日向産も

亦下品。

大隅の名産にて諸葉の最上とす。薫高く、風味佳。國分寺の境内に産する葉勝。美

味也。其故に國分の名あり。産する地聊

かなる故販賣するに足ず。皆鴨嶽郡の内

より出る。薩摩の産云ふは誤也。島國

府云は薩摩の國の部也。葉形も賤。下品

とす。一體此國暖なる故中春種を蒔夏土

用明頃。曝乾初秋には江戸へ稿出故葉に

粘脂なく、火を点するにうつりよく消さ

るを賞す。三四年圍置古葉になる時は

薫すぐれて美也。價高し葉に力ありて細

刻するに碎さる故鬚たばこの名あり。長

崎は切て栽し土地なれども至つて下品な

り。日向の葉形に似たり。

名葉をくゆらせ坊主わるくいひ

名葉は上等國府の事であらう。

荒畑は一夜さぎりのはれに買ひ

これも上等國府ではなからうか。薩摩煙

草が江戸で勢力を占めるようになったの

は島津重豪の女が天明元年十一代將軍の

夫人になつた關係上薩摩煙草薩摩芋薩摩

女もてた云ふ事である

舞留を常にくゆらす草膠とり

舞の煙草の切口も觀世水

猿若の煙草やたとと舞許り

舞留くろふ後家するも也

薄舞に口の合はぬは國煙草

薄舞へおもしろしをかける三會目

『よのころ』誌五ノ八に拙稿を寄せたが

舞留は一種特徴のある良い煙草である事

がわかつた。草履取は其主人から時々少

しづ、頂戴して得意になつて鼻から煙を

出したのであらう。昔服部を第一の名産

とすれ共、あじはひ辛烈故、今は國府を極

上品とす。芬郁なるが故(價も高し)なり

柔和を好めるものは館を良とす、辛さも

香氣を好者は舞留を上品とす。三ある留

は葉小さく色赤く肉あるを良しとした。

國府續たる名葉にて奇香異味國分舞留美

を競然といへども、此葉甚辛烈故人是

を好す、近來弱和を吸所以なり、上を

留葉と云(至つてきつ)中を舞葉と云

下を薄舞と云、上土地に産すれば葉に力

なくとも薫有、畠地へ産するを上品とし

て俗に舞と云。田畑へ産するを下品にし

て服部と云。下品なるは火を點するに忽

滅。都し我國は何地にても田へ産する煙

草は皆下品也。稻を耕すに聊障なし舞留

草は皆下品也。稻を耕すに聊障なし舞留

上守下の葉さもに五年七年の古葉を賞美

す。ここに止葉は數年圍置しを上品とす

氣味辛といへども香氣強、口中清潔にし

て水を激がごこし。薰考ふるに中葉未熟

して枯萎する者、味薄けれども芬郁也。

これを舞と云、中葉下力なきを婆婆と云

俗にばあごとも云、舞と云ふ名あるに

よりに癖の老たる意なるべし。

うけ出され館と云ふもののみなり。

御治世の館は煙草のむばかり

すれ違ふ猪牙に館の香國府の香

まひよりも館をくんまに稻荷町

上州の館を煙草屋地切にし

稻荷町が喫むたりするから、川柳では館

は安煙草にされて居るけれ共、必ずしも

そうではなく、上中下のあるは當然であ

る。上州館、秩父館、山名館、田館等産

地により名付けられる。上州高崎の南の方に、山村村廣大寺境内

に産する煙草は香氣他に異なり、口中佳味にして奇なる名葉なり、香氣佳なる時は果して辛烈ものなり、この葉柔和にして薫あり。然りといへども漸く八畝に過ぎざる畠に産するものなれば販賣するに足らず近郷の土人忍びて此寺内の土を採歸り。我種する煙草の莖の元へ置ききは。句芳云都て山名村の産は寺内には劣る。といへども、味他に勝れり。これを高崎の市に販ゆわに高崎多葉粉の名あり。年々作法豊凶により下品の地たりとも、上品を産するものもあり上品の地といへども暑中雨降らざる時は脂流さる故至つて辛し價賤し。總て諸葉斯のごとし右の産を秩父館といふ、上州館村の産に葉形似たるを以て名さす。全く秩父郡は山又山の地なるによつて日影多し、初冬に至らざれば曝乾さる故葉に濕を含みあり、然れども柔和にして口中美味なり、安永の季までは濕深きによつて、此葉を好むの稀なるに天明三卯年信州淺間山焼し上

州邊悉砂降田畑燒砂多分にして、煙草の産地甚下畠なる、其後秩父郡内の土人肥糞を選び、二年宛に畠を休め作方乾方功至し、終に上品を製し、上州館より勝れり。

灰吹の蛇は龍王の煙で出来狂狗であるが、龍王煙草は非常に煙が多いのである、甲斐國龍王村附近の産である。

惣名を龍王といふ、土地砂土にて初秋には老葉乾て江戸へ積出す、香氣館とは異り餘味なし、吸に煙多く火を點するに、消ざるを良しす。黃葉多きと食ば口舌を破り頭に唾くに至る、價館館より賤し、藤木小屋舗三日市邊は管を以て莖元を結葉厚く莖太く味重く辛烈こ競きもの

あらず、俗に甲州の鬼殺といふ、江戸の人々體食はず、これを好者は田舎人か或は老人なるべし、多く食はば毒もあるべし。

銀煙管松川をのむつらいこと
句上では松川煙草は下等物になつてゐる

松川の上品四軒より出、餘味なし臭氣あり、火を點するに減せざるを良しす、漁師水主の人手にて揚火皿へ盛に火のつかざるこなし、房總の海邊へ江戸より贈る。

輕井澤沼田煙草のす切りなり川柳では沼田煙草も下等物にして取扱はれ「輕井澤太夫ばんかをくゆらせる」「さきついで吸附けて出す輕井澤」の句に列べて地方情緒を出してゐる。

葉大にして色青く、口中味賤して臭唯火を点て減ず、夜中吸ぎも口舌を損せざるを奇す、總國の人なべてこれを好めり甲州をばくりばくり姑のみ

姑ばば甲州月に二斤のみ
●甲州煙草の事は和漢三才圖會にも載つて居る、煙草の歴史にもあつた如く長崎に植られた煙草は、丹後方面から甲州路に入り野州へ移された(此二句は前述龍王の項に陳ぶべきであつた)一ヶ年の内に諸國より江戸へ來る煙草の高、大概を左に記す。云々(以下三〇頁下段)

川柳 漫畫 累卵の遊び (七)

路 郎 評 紫 舟 松 郎 畫

かどがとれたとは俗物何をいふ
俗物は度し難く、浅田飴は良薬にして口に甘しか。こちらで匙



けしき 齋

を投げてゐるのも知らず、
「さうだね」「そんなものかね」「まあ、さうだらう」とい

加減にあしらつてゐれば△△さんも近ごろは、すつかり角が
れたなごゝぬかす。なるほご莫迦につける薬はなきもの也。

その罪な舞臺に妾目をそらし 無 心

溺愛に乗ずるは妾の常套手段なり。肉を切賣り愛を金に換算す

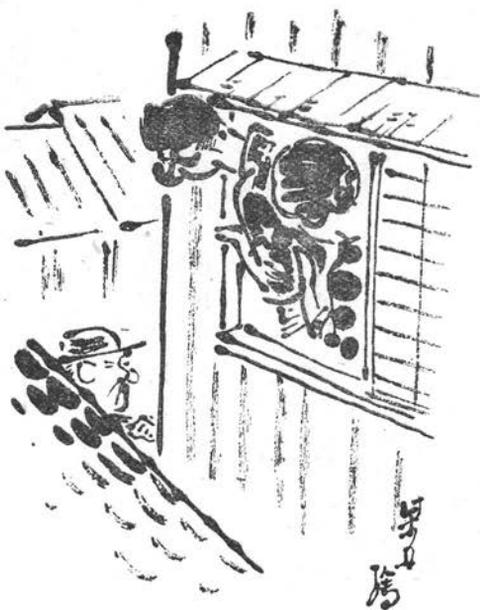


けしき 齋

るが故也。されど旦那の妻子をドン底生活に突落して心地よし
まは思はざるべし。
事に觸れて良心首を擡げんか。錦紗美ならず、酒苦からん。一
塊の腐肉を罵る勿れ、妾もまた人の子也。

愛の巢を壊しに父がはるぐ來 志 郎

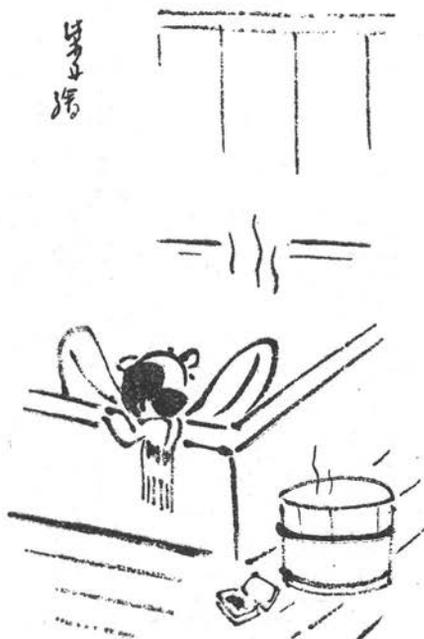
愛し愛さるゝ者は常に束縛を厭ふ。愛の巢の建設さるゝ所以也
 「こゝは華麗目を欺くやうな美しい宮殿だと思つておるで」
 「はい、思ひました」



「それからお前、自身を其宮殿の女王だと思ひな」
 「はい、よござんすよ」
 ミ云つた風に月日は夢の如くに流れてゆくものなり。寸善尺魔を知らずして……………」

をなご湯で宅がくののろけやう 紫 舟

ふみ耳をそばだつれば
 「お前には、この白粉がい、だらうこいふて宅が大阪で買つて来てくれました。宅はお化粧のこまで氣をつけてくれます」



こいふ聲がする。隣の細君の例ののろけならんこは思へぎ、靜かに湯槽に沈んで更に耳を澄ませば、女湯ではなほ旺んに宅がくの連發也。いや、はや。

主婦の杓子権

藤里藤園

枕めし嫁が杓子の取りはじめ(樽三)

此句の表面に現はれたる意味は、たゞ單に姑が病學に在つて嫁に食事のお給仕をしてもらふ、此時が嫁が此家に嫁して以來杓子を手にした始めである云ふ、一見平凡な句であるが、此句を我等の祖先の家庭生活の習俗より窺へば甚だ興味ある句なるのである。

近刊の『牟婁口碑集』の中に南紀田邊港の土俗を叙して、一家の臺所を切り盛りする(支配する)主婦が、息子の嫁女なき、即ち自己の後繼者に臺所の切り盛りを譲つて、隠居の地位になる事を『杓子を譲る』といひ、誰某は杓子を譲らぬなきいふ。杓子を持つこは主婦のこ

を指す、尤も近年はあまり言はなくなつた。一ミの記述あり。

臺所を切り盛りする即ち臺所の主宰権を稱して、私は杓子権と呼ぶのである。

又『杓子を持つ』云ふ事が即ち主婦たるの權力を現す言葉となつて居つた程、女房、杓子の關係は古來普遍的であつた。黄表紙百種の中『浮世操九面十面』と題せる一篇に、西のみや三郎兵衛むびすの面、手代の鬼助は鬼の面、それらの面を被つて出る中に、女房は不斷山の神の面をかぶり時々あばれまはるこあり。更に又、一時山神の神杓子を持ちてあばれる故、今の世に十三神樂の山の神は杓子を持ちてさぐぐ云云一も見てゐる。

山の神と杓子の因縁は中々深く其二三の例を掲ぐれば、美濃の土岐郡の某村の或舊家では毎年長さ一丈ある産衣を仕立て、山の神に献納する、其禮物として大きな杓子を下されて家に傳へた、云ふ話が『扶桑怪談實記』巻二にあり。杓子を持つて踊るこはあながち滑稽一方の所作ではなく、出羽羽黒山十二月晦日の松例祭の夜の年籠りに、終宵「シヤモジ節」を詠ふは玉依姫神之を好み給ふ故に『三山小誌』にあり。豊後三重町邊では御日待講の時に杓子踊云あり、新參の會員の役であつた。津輕地方に昔行はれた、正月二十日の杓子舞に『杓子舞を見さいな云々』云ふ、古風な章句を傳へて居るのは明かに杓子工が杓子を持つて舞ふこを示し、山の神を和めるのが元の趣意であつたこを想像せしめる。是によつて考へるに女房を山の神と呼ぶのは何故か云ふ難問題も、いろは歌でおくはやまの上に在るから等云ふ牽強

附會を忍ぶ迄もなく、それこそ女房も山の神も等しく杓子を表識して居るから斷定するこゝが出来る。杓子を女房の徽章とするこゝに就ては理由もあれば、又實例もあるのである。「諺語大辭典」に杓子は即ち食物分配の唯一の機關である、嫁に杓子を渡す云ふこゝは、姑から世帯を引継ぐこゝであるこゝあり。佐渡では此杓子を渡した日から、飯も嫁に盛つてもらはねばならぬのである。即ち杓子を以て少くとも一種の Realia として居たこゝがわかる。又口寄せ巫の隠語の中に、亭主を弓取りと云ふに對して、女房をへらと云ふと稱するは人のよく知る處である。「へら」は即ち扁平なる飯匙のこゝで、現在我等が普通米飯に使用し、又「くつめき御免」など、書いて百日ぜきの呪に門戸に打附ける平均杓子を、東北其他の地方では「へら」と呼んで居るのは、殆ど方言とも思はれぬ程普遍的である。津輕地方では食物に不足するこゝを

「へらかつぐ」と謂ふ。用ふる所が無いから擔ぐのであるう又單に「へら」と謂へば姉女房即ち夫の年下なる場合を意味する由「青森縣方言訛言」にあり。多分は亦「へら」の實力の大に行はれて居る状態から起つた言葉であらうと思ふ。何れにして姉女房を山の神と云ふのは、杓子を手に置いて考へて見るこゝ、あまり無理なあだ名ではなさそうである。

山の神かい込んで出るよしの鉢(同上) 栃木縣足利郡三重村五十部の水使神社の御影、(別圖参照)は、此句にあるやうに婦人が左手に飯櫃を、あたかも千本櫻のいがみの權太が桶すしをかいたんだやうに持ち右手に公卿が笏を持つやうに杓子を持つて立つて居る御姿である。此社の現在の信仰は花柳病の祈願であるが、安永度縁の起文に依れば明白に田祭の痕跡があるから、穀神であつたのである。又薩摩地方の田の神の石像が、必ず右手に杓子を持つてゐるのを見るこゝ、

五穀の神も亦杓子を以て標章したりしが如く、江州多賀神社の渡御には、古くは大杓子に白布を延へて渡せしこゝあり。同じく大杓子を以て世に聞へて居たり。芝愛宕社の一月廿四日の祭の如き、伊豆三島明神の一月六日の御田打祭の如き、共に大杓子を祭儀の中心としたのである。美濃の美惠寺の舊正月晦日の御蚤祭などにも、人形に大きな杓子を持たせて山車に載せて引きあるき。其杓子の上向きと下向きとに由つて、年内の晴雨を占ふ習ひである云ふ。山の神は春の始に下つて田の神と祭られ、冬の始に山に登つて山の神と祭られて居る云ふから、同一神が廻り廻つて農事を保護せられたのである。

杓子の一種におたま杓子と云ふのがあつた。『足翁翁記』卷三には御多賀杓子の轉訛であらうと云へるも、『越後名寄』七には杓子の型が人魂の形に似て居るかと云ふ、一見空漠たる言傳へを記載し

て居る。野州足利郡福居なごで、死者のあつた家では、籠又は笊を座敷中轉がし其に杓子を附けて野中の道に棄てることがある。之を其病人の爲めに神佛に祈願を掛けて効の無かつた場合に限り、願果しの代りに行ふは、喪家で鬮靈の方法として籠なぎを轉がすのは多く聞く例で、



必ずしも願掛けに終始せぬやうに私は思ふ。此場合特に注意したいのは杓子を附けて之を野外に棄てる點である。即ち死人の靈をして杓子に依らしめたかと思ふ故に杓子を靈の依代にしても尊んだのであつた。見られるのである。頼母子富籤の場所へ杓子を懐中し行くこよく當るこ云ふ迷信や、吉原の娼家では客を誘ふ呪術として、杓子に眼鼻を描きて四辻に至り、四方を招きて自分(倡女)の前を三遍叩

く、斯くの如くせば客が来るに信ぜられ今日にては各地の色里で行はれてゐるそのである。大文字樓の舊物云ふ黒塗にして開丸く朱塗になつた杓子が久しく神秘の靈體として錦の裂れに包まれ、彼家に祀られて居た云ふ話に見ても、「越後名寄」の説は空漠たるものでないこ

ミ、なる譯である。越後や奥州では娼女の事を

杓子と呼ぶのは、例の飯盛と同じく縁話によるのであるが、これは米飯に用ゆる平杓子から前者は流れを汲む云ふ心で汁を汲ふに用ゆるおたま杓子から来た俚言である。兎に角に杓子には表向の用途に全く無關係な招く云ふこが、常に大なる働

きをなして居つて、待ち人を呼ぶにも三度招き、又四方に向つて客を招くかと思ふに「俚言集覽」の説の如く此物で招かれるに三年の内に死ぬ云ふ話もある。これ等は杓子が靈の依代であるが故に、人の魂を攝取する神秘な力があるを考へられたものである。又一方には赤兒に産聲を揚げさせる手段として、杓子を以て扇ぐ風習が周防邊にあることから推論して、京都なごで杓子の折れ又は毀れるのを、近親に子の産れる前兆と見たのも一つの魂の解放とも考へるこが出来

る。是れは決しておたま杓子の稱呼に拘泥した説ではない。「越後名寄」の人の魂の形に似た杓子本来の形に考へ及ぶ時には愈々其推定が事實らしくなるのである要するに杓子には二つの神秘があつたのである。一つは食物分配の唯一機關として、更に田の神山の神の標章となり、

延びては主婦の標識となつた。他の一つは其形が人魂に似たる處よりして、常に

靈の依る代なりとし。此物を以て人間界
 ミ幽冥界との靈媒と信ずるに至つた故に
 臺所の杓子權の受渡しは、食物の分配機
 關の讓渡と共に、家庭の祭祀權の受け渡
 しを見るべきである。是等の二大權を受
 け取りて完全に把握したる者の標識が「
 杓子を持つ」者で即ち主婦であること
 なる。

現在に於ても陸中遠野地方の農村にて
 は「杓子權讓渡の儀式」は「へら渡しの
 式」と稱して至つて嚴重なる作法が守ら
 れてゐるようで、又杓子權の威力も甚
 しきものがある。且つて同地方の成家で
 は町から嫁を買つたが、百姓仕事が出来
 ぬ故に、春の農繁にも嫁は家に居るの
 だから、飯ぐらゐは炊かせてもよさう
 に思はれるのに、其家の主婦は其様なダ
 ラシのないことはせず、自分が多數の奉
 公人と一緒に野良に働いて居ながら、さ
 あ晝飯の刻限だといふと、汗みぎろにな
 つて田畑から駆け戻り、大忙がしで飯支

度をする。

其うち晝あがり人がそろく遠つて
 来るこゝに騒ぎじ、若い嫁御ばかりは飛
 んだ後生樂であるが、其代り籠持の權威
 は大したもの、例へば主人も雖も之を
 左右することは出来ぬ。其姑が愈々老境
 に入り又は別種の事情で主婦權を引繼ぐ
 こゝになるさ、大抵は大晦日の晩さいふ
 が如き一年の區切りのよい日を選んで、
 其式を行ふこゝになつて居る。

其式といふのは、先づ姑は鍋の蓋に大
 小のへら(杓子)を並べて持出し、其中の
 大籠を取つて爐の鑪鼻を三度叩き、それ
 から又鍋蓋に載せてあるものを釜の上に
 置いて、兩手でもつて嫁の方に押遣るの
 だ(元)

社告

本誌の募集句の締切は從來毎月十日であ
 つたが編輯の都合上今後毎月五日に繰上
 げるこゝになりましたから嚴守して下さい
 するやうお願い致します。他の原稿も同時
 に締切を早めるこゝにいたしましたから其
 のお積りに願ひます。

編輯局

清涼飲料
アサヒ
ビール
 ツロトシンポリ

募

集

句

和尙

蛭子省二評

本誌の選評は年に一二度に過ぎませんが、此際多少詳かに、そして無遠慮に批評させて頂きます。早見の誤りに對しては御高教を仰上ます。和尙を題材にした古句は幾日もありませぬ。然し多く約束に縛られて居るから類別するに。そう佳吟もありませぬ。評の中に記入する事に致します。

一休が名を残したる大徳寺 春甫
單に説明で未だ句を成しませぬ「佛法の脇道をゆく紫野」(古句)紫野に脇道がよくない。大徳寺を詠むものではない。一休ではないが「大徳寺水には合はぬ所の名」一立者の子を出使の大徳寺(古句)俱に佳吟ではない。

檀家から和尙名付を頼まれる 正春
〔佳〕和尙。いつも同じ菓子(源坊) 源坊
〔戒名も和尙がよむと有難い(源坊)では普通である。有難いよみ方をわらつたらばと思ふ。〕

足の蚊を和尙拂ふて叩いてる 松水
「或る夜の和尙戒を皆破り」松水、或る夜さ何にを表現したものが更にわかない。

説法の金で和尙は三味をき、みどり葉

難がある推敲して頂き度い「死んだ金ばかり遣ふぞら和尙」(古句)

名僧もほとく、弱はる後家の戀 清宵

後家の戀さ打明けてしまつては浸潤がない「大和尙はさく困る後家に逢ひ」さくもしたい。古句には「あの後家に和尙桂馬さ打たれたり」

吠えられて和尙の足が早くなり 同

複雑味がないから和尙に限らない句さなつて居る「吠ねられて和尙は一寸球數を繰り」少し刺戟が出てくる。

もう終る經へ御馳走句つて來 金鐵子

「權經(勝手)から來て句はせる」さ如何繪の様に和尙は朝の庭を掃き 同

若和尙たこの味も知つて居る 同

よろしからず、古句には「天蓋は酔にしてくれと和尙いひ」「天蓋へ衣をかけて和尙くひ」「天蓋を和尙むしやむしや破却する」「伏せ鉦や天蓋でくふぞら和尙」どれもつまらぬ、天蓋はタコノ事、伏せ鉦はアソビの事、金鐵子氏の作で「和尙を代る々々子は覗き」と「和尙のくつさくだけ

(二十三頁の續き)

三〇

○國分舞留下り物、十四萬八千斤餘○上州秋父館、百六十萬斤餘○水戸下野大山田、二百十六萬斤餘○甲州其外諸國三十萬斤餘云々

菊煙草御苦勞なしの顔でのみ

淵明は生涯のんだ菊煙草

菊の葉を乾してのんだものである。狂歌に「咲残る菊をたばこに吸ならば、草の香こもいふべかりけり」

くし巻に丈長かけて玉煙草

玉にきずつつけて一ぶくのんで

玉煙草先づ胴はらの毛をむしり

玉煙草見へたんびにゆるくなり

くらはれぬ嬪アは百の玉くづれ

吸付けて出せば買つてく百奴目

玉煙草こは周圍を紙で包びだ煙草の束

あこは改めて執筆

(参考) 鳶魚氏の「足の向く儘」一四〇

頁に曰く「碩が書いた世間娘氣質は享保元年の板行だから今日三百七年前の小説なのであるが、昔は女の煙草のむこ遊女の外は怪我にもなかりし事なるに今煙草のまね女を精進する出家は稀なり、こ

た奥座敷」は聲調表現に再考して下さい
村中が寄る三和尙を床にすわ
大和尙お布施をあてた辭儀をす
頼まれて和尙仲介人になり
上五は説明

和尙さんセルの袴をはいてゐる
本堂に座る和尙へ背の丸さ
(佳)山門を出る三和尙へ虹かき
喘息を氣にいて和尙落葉かき
釋の字を氣にいて和尙落葉かき
(佳)社會部へ和尙袴をはいて來る
村長三和尙別間でお茶をのみ
説教のすむ頃和尙せきをする
速夜には和尙が經を早くやめ
讀經がすんで和尙は汗を拭き
表面だけを十七文字にしたのでは充實性
がない。此の和尙が質素な人だとか田舎
者臭い人だとかで懐るから手拭を出して
汗を拭いたとかでも言へば、そこに整齋が
ある。印象付けるものがなくては句の落
着かない。

溼魔のいはれ和尙の酒が過ぎ 鳴穂堂
澤庵和尙關係の古句では「其後は淺漬和
尙ばかり出來」位はよろし「澤庵の墓押
にをくやうな石」澤庵の近所赤種の鹽だ
らけ」に至つては古へも、イタヅラ者が
多かつた。

秋咲いて和尙に今日は客があり 醉夢
村中で和尙を頼むもめが出來 同
大窓の下に和尙の一人ぎり 香行
「爪のある傘をさすいい和尙(古句)」
蔭口がきこへ和尙はやけに呑み 吾呂句
單に作つた句で眞實味かうすい、昂奮し
た句の作り度い。

讀經の朝の和尙の聲が澄み 千鳥
何等の感激をも擱むてゐない。

再建の寄附の半ばに和尙やみ 萬よし
遠縁三云ふが和尙へ智慧をつけ 同
和尙にも株式欄の用があり 同
「にも」が多少理屈を誘ふから情味を毀け
る前の相場の句程直接でない丈けは好い

(佳)體面のたに和尙は株を買ひ 雜草堂
(佳)内職の茶の湯のたで酒に成。 同
醜男の和尙檀家にうけがよし 龜 鶴
(佳)釋儀場のかし和尙は電車か 玉 政
棺の蓋あけて和尙は又泣かせ 同
佛前で浴衣の和尙甚をかこみ 同
和尙様歸つた後ですすり泣き 光 哉
父兄會和尙の顔も見えて居り 同
此句面白けれど「見えて居り」では水準線
以上に出でない。

云ふので煙草が婦女全體に行き渡つてゐ
たのが知れる、元祿永寶の女は服部煙草
を好むだが、約四十年を過ぎた延享の頃
の女は和泉新田三云ふのを喜んでのむだ
さうして其頃から薩摩國府が珍重される
ようになつたのである、刻煙草を賣り始
めたのは貞享の頃からの事で其以前は飲
用者各個が葉を買つて手刻み三云つて自
分で刻み、煙草の行商があるようになつ
ても寶曆度には五分切三云ふ隨分荒いも
のなのだ細い糸のようになつたのは
安永天明以後のこゝである、自分で刻む
頃は勿論刻煙草があるようになつても天
候の加減に依つて火付が悪い飲口に嬉し
くない處がある。それを安永天明になつ
て諸國の葉を調べて刻み上げる火付の
悪い三云ふこゝがなくなり、飲み口に癖
のあつたのを彼是混せて味を整へたそ
れが地切三云ふので喫煙家の大満足を得
て大に行はれ喫煙の歴史に區劃を與へた
斯なる煙草屋も面目を一新する」

川柳書架 (廿八)

新川柳壹萬句集

川上三太郎編

老和尚あきらめかねた負碁なり 木三
 棚經の和尚へ別な包みなり 花蝶
 和尚には惜しがらるる新知識 笑人
 川柳をひいて和尚は法を説き 同
 珠數ふつて和尚子供を泣きやま 柳秀
 古句に「和尚機嫌へくる手に珠數を出し」
 佛公さやらで和尚は圍ふなり 同
 川柳では妾と圍者を區別し「圍れの親寺
 社よばはりしてゆすり」圍れば法界格氣
 うるさがり」など多くの例がある。

大黒の酌で和尚は酔ひつづぶれ 同
 古句に「必ず厘厘へ出やるなぞ和尚いひ」
 「ちやくさし和尚の居間に鯨ざし」「有髮
 では置きにくいよと和尚いひ」「辨天のよ
 うな大黒和尚もち」ぬつべりさ和尚妹で
 候さいひ」

この所和尚の目立つ 四疊半 同
 (佳)和尚様一本つけて如才なし 綠之助
 教員の資格もあつて和尚老ひ 同
 因縁にまとも和尚は珠數をくり 伴内
 山門の菓子に和尚鐘をつき 同
 鐘を味むだ句は他になかつた「早鐘に和
 尚を見れば猿轡」(古句)
 御寄進に口説上手の老和尚 突支坊
 説法が上手で後家を迷はせる 琴人
 (佳)境内の地藏へ和尚慾が出る 京
 裏門を叩く和尚は酔ふて居る 同
 縁側へ和尚仙人掌ならべてる 同
 ヘルメット和尚の甥は背が高し 鎌月
 愛想に和尚野球の話もし 仰山

和尚まで小作争議の渦へ入り 無
 碁敵の棺へ和尚もさびしそう 豆
 (佳)豊年を見越して和尚よく喋り 吉
 會葬に和尚仲々立たぬなる 童
 藥瓶和尚は髭の中にある 町
 葱提けた和尚へ村が暮かかり 茶
 鑑定をしてる和尚の長い眉 撫
 茶の香りほど和尚は布施を受け 二
 寄附並さいふは和尚の普請すき 眠
 卵塔場和尚のほめる月が出る 新
 總代と辭儀して和尚寄附の事 九
 書出しへ和尚こまかい錢を出し 鮎
 (概評) 和尚と碁敵の句が尤も多く、後家
 關係が次ぎ、犬を連れて下山するのが不
 思議にあつた。

秀逸

法用でなく大阪へ和尚来る 萬よし
 を推舉し、現代作家の觀察外の古句二三を
 記して終らむ。

用心に置かうと和尚けちな槍
 戀死の諷諭には和尚作を入れ
 分別の外に和尚は如意をもち
 いやらしいものは和尚の日傘なり
 何宗が知らず和尚が難をかひ
 和尚様草履さりに御手がつき
 はまでと和尚傘うちながめ
 むつこに和尚脇さしれたられる
 中啓でつくやうに駕和尚出る
 皆味ふべき作であります。古狂句には
 妙の字の偏にはまつたごら和尚

▼本書の巻尾にある編者の「目玉、提灯玉」の一節を抜く

此の「新川柳一萬句集」は大正元年から昭和二年五月まで約十六年間の、總ゆる川柳専門雜誌、新聞その他から優秀佳吟と思はれるもので、その作者者を分布的に鳥瞰すれば、東京、大阪、京都、九州、北海道等、日本内地はいふまでもなく、遠く臺灣、樺太、朝鮮、滿州、遼東半島、中華民國にまで及んで居ります。即ち五七五、十七字の句を介して、東半球に活動して居る澤山の入々が、此の句集を透して堅い川柳の握手をして居る譯です。(後略)

▼昭和二年九月十六日發行。四六横綴三七〇頁。定價壹圓五拾錢。發行所は東京市日本橋區鐵砲町六番地磯部甲陽堂。

▼本書は東都柳壇の重鎮川上三太郎氏の編纂で、現代句の類題別句集として尤も纏まつたものである。初心者参考句集として座右に薦む。

音のせめように和尚は銅鑼をうち

大黒を和尚布袋にして困り

ごちらでもよし／＼と行くごら和尚

よし／＼と、吉原と芳町の謂ふ學ぶ要なき

句には

間男といはれず和尚くやしがり

市泥棒のやうな目に和尚あひ

市泥棒は淺草市の大黒を盗む事の轉用。
ごら和尚藝者の撥で咽をなで

末の子

それもさう^ま末の子に手がかり
 末の子を弟おもしろさうに見る
 末の子はいつち仕舞に泣いて勝ち
 末子フト氣のついた^ま稼ぎに出
 末の子へ母は茶菓子をもつて去に
 末の子の機嫌なほすに負けてや
 末の子がごう^まものになさうな
 まゝ事をはなれ末の子飛んで来る
 末の子が泣くさみんなが叱らる
 晩酌の膝に末の子寝てしまひ
 末の子にボストの口が高くつき
 末の子も黙つてをれぬ口を切り
 末の子か孫かお客はちと迷ひ
 ほし^まけぬやうに末の子^ま歸り
 もうお樂でなご末子見上げ
 末の子のために強くも言ひ切が
 これが一番下ですと頭なで
 末の子は大きうなつて思ひ知り

助三 耕水 金鐵子 銀笛 鮎美 同 喜さし 郊村 聞路 笑人 柳秀 縁之助 伴内 玉仙 京郎 静山 秋

ごら和尚稽古の撥で咽をなで
 云ふのをみた。象牙の撥で咽をなでれば魚
 の骨のさつたのがされる云はれて居る。
 前句はそれであるが、後句稽古の撥はッゲ
 位であるけれど、そこに滑稽味は加はる様
 々ある。拙吟一つ。

日々是好日

ボロ買へ和尚盜茶ごつりを出し 省二

喜田飯山選

末の子をかたづけ母ほつこす
 高野山末子の嫁に手をひかれ
 末の子へ火先になり後になり
 長男のなやみ末の子平氣なり
 お孫さんじすか末の子を問は
 復習は末の子が来て場所を變へ
 大望を抱いて末子 國を立ち
 末の子はなぜか兒貴になりた
 末の子が泣かされて来る 臺所
 末の子は姉の脊中へ寝て 歸り
 末の子の寺より外に知恵がなく
 末の子を思つて後妻思ひ切り
 末の子が泣かされて出る子供部屋
 末の子を負うて面會暗く来る
 末の子にかくれて姉はそと出る
 末の子のつぐ一合が肉になり
 末子ちご毛色の違ふ趣味をもち
 末の子を泣かして兄は外へ逃げ

無心 萬よし 悟郎 青司朗 東城子 松坊 源水 朝臣 豆蔓 二水 衣通史 翠峰 鳴穂堂 同 醉夢 香行 千鳴 光哉

正

誤

校正子

▼半文錢氏のビイドロとギヤマンの中、

九月號の5の句は「泳ぐを猫ねらひ」二

四頁下段五行目、翁草庵の庵は不用、二

五頁下段三行目、索引は孫引の誤。同行

野傾支。二味線は友の誤り。同七行目山田

與清は高田の誤。十月號の二九頁上段一

行目傾自は向の誤。同十八目逆さ逆さと

あるは、重復。同下段三行目硝子を逆さ

まに、の脱字。同十七行目箱は飲の誤。

三十頁上段三行目西川正氏は休の誤。同

下段四行目髪めちやの脱字。十四行目の

句、手はかきは牛の誤。三一頁上段十行

目兩は西の誤り。同下段十一行目エンダ

はグの誤。同十五行目なりはありの誤。

尚ほ硝子の句解中(一)の句の「わるさ

まさはせる」は確の客に對する子供らし

い言葉と解する方が穩當なので、江戸ッ

子の氣質ム々は取消すこと。
 ▼九月號青明忌「瀧」の句中、素琴さあ
 るは琴峯の誤。十月號近作柳樹の句中琴

末の子の出世で村の名が知られ
 日曜日母と末の子だけのこり
 末の子を兄等二人で守り立てる
 末の子が泣いてきやうだい寄る
 末の子ご泣へみんが送つて來
 五つにもなつて末の子乳房へ寄り
 末の子にせめての望かけてるる

夫 婦

三 福 選

飯の石笑ひ合ふのも若夫婦
 略式の縁で夫婦共隊ぎ
 ホネームン立派に妻と書き終り
 刻過ぎの御飯を食べる若夫婦
 大詰は夫婦になつて打出され
 極道の子に愚痴の出る老夫婦
 夫婦ざり温泉の宿日が永い
 荷車の夫婦は飯にさしかり
 人の子を見てうらやんだ夫婦
 たれも出ず夫婦喧嘩の派手な音
 二階借夜丈け歸る夫婦なり
 妾見の脊中へ夫顔を見せ
 香具師の妻さくらの中一人
 女房の心強さは持參金
 一年はお雛のやうにたつちまい
 突然に訪ねて友に妻があり
 旅先の名所々々で妻へ書き
 犬丈の税を拂うて夫婦ざり

雷相 突起坊 茶撫朋 町二 花蝶 龜政 鵜鶴 雷相

母親のこれも末の子へこさへ
 末の子も入學出来る年になり
 五つ六つ頃を末の子派手にして
 (人)末の子が兄の普請へ口を出し
 (地)末の子を連れて無沙汰の里へ行き
 (天)末の子を可愛がるや泣かせる
 (軸)末の子を差上げるとき旅がへり

青 佐 木 三 綱 共 選

新聞へ三組揃つて褒められる
 物質に若夫婦チト侮られ
 共隊ぎ先へ歸つて腹がへり
 添添けてからローマンス忘れられ
 新婚の「操縦法」を笑ひ合ひ
 別々な趣味あり夫婦へ灯がこも
 夫婦愛映講二人へ諭すやう
 若夫婦一年目には犬が殖む
 宿帳へ丈の夫婦で死んで行き
 新婚の當座を働ぶ時もあり
 (佳)旅日記扉を妻と手をつなぎ
 妻として夫としての朝ごも来り
 あてられに新宅へ母今日も来り
 夫婦共眼鏡近所は寄り附かず
 義理づくの夫婦平行線をゆく
 (人)淋しさは夫婦喧嘩に勝た汗
 悲喜交々到来的と言つたやうな句、想は古
 くこも其仕立方一つで現代にも生命があ
 る事を證する句

眠聲 春甫 鎌月 正春 九柳 飯山 琴人 豆蔓 二水 高峰 町二 眠聲 映紫則 みり葉 紅 逸水 松路 太人 路人 銀笛 町二 金鐵子

岸さあるは翠峯の誤。十月號賦句祭「先代」の句中醉峰さあるは翠峯の誤。
 ▼十月號「生業の古川柳」の中
 鮎實根津へへなく擔ぎ込みからあさり値段が出來た音がする。と訂正

年賀名廣告を募る

奮つて申込まれたし▲

一口 金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一口分の原稿はなるべく簡單にお願ひいたします
 廣告料金は前金のこご。

▼申込期限十二月五日迄(新年號)
 (新年號)

大阪市港區八條通二丁目一二

川柳雜誌社事務所
 振替大阪七五〇五〇

螢ヶ池句會の中
 臍くりの分を吳服屋心得て馬行
 吳服屋の前へ巡禮も立止まり 昭郎
 吳服店薄暗くして一人居る 杏三
 と訂正。雅號で中心及び中正は共に中山の誤。一居は一閑の誤。
 前號は不馴の人が校正いたしましたので大變誤が多く御迷惑をかけたことを

(地)恩給に生ずる夫婦の嚴に過ぎ 北公

文官分限令第何條に依り退官となつた元

司法官の生活が面白し

(天)廢業に夫婦小く今日も居る 清宵

半分雨戸を閉し、急に口かすも少く暗い

ない力ある句、卷中の白眉なり。

(軸)惡み得ぬも、一つに妻が 三福

不 二 綱 選

噂では夫婦でやつた事らしい ひさし

共稼ぎ先に歸つて腹が減り 二水

ホネームン立派に妻を書き終り 松水

夫婦喧嘩勝つて淋しい汗を拭き 金鐵子

極端な土方の唄を夫婦抜け 茶無朗

針仕事傍で長うに伸びてゐる 郊村

夫婦もう子の行末を考へる 翠峯

夫婦者らしい池の中へ網 太路

子の事でもめた夫婦はうらやま 千鳥

持參金今日も亭主は水仕事 龜鶴

子の寢息夫は讀んで妻は縫ひ 雜草堂

子のゐるなにか夫婦をいらした 京郎

夫婦でふなばかりの日が多過ぎ 笑郎

共稼ぎ夕餉の疲れさつこ出る 町二

頭痛膏やをら夫へ向き直り 豆蔓

風もなし波もなし只老夫婦 さ舟

夫婦きりです遊びにいらつしや 九柳

お二人でした茶屋の下女は云か 緑之助

子が無くて夫婦淋しく金を貯め 鮎美

よく似て夫婦ですよ八百屋云ひ 醉夢

裏住居二人食ふのに苦しがり

疑が夫婦の胸に晴れた今日

家族風呂夫婦と見ぬぬ人が出る

出港の銅鑼別々の氣で泣かれ

まゝごこの様に二階で二人住み

産褥へ煮けた加減を持つて来る

憎くらしいものに女房抜く白髪

夫婦さも眼鏡近所は寄り附かず

若夫婦昨夜の夢さ云ふ話

添削を夫に頼む睦じさ

伯父さんが去ぬさ夫婦の聲に

エプロンを外し楽しい膳につき

歩くのを連れて兩方から握り

里で泣く妻へしのんで逢う行き

祝言の二人素知らぬ風に座し

思ひきり昔を話す老夫婦

愛の巢に新聞記者が訪れる

七 客

行くさこも行かれ妻を連れて居る

名ばかりの夫婦でしたさ里の母

醉が醒め妻の意見に參らされ

指帳に丈けの女房で死んで行き

指をさす方へ女房も伸び上り

平凡に生きて銀婚式となり

夫婦愛映畫二人へさすとすやう

(人)恩給に生きたる夫婦の嚴に

(地)押賣へ時の明かない若夫婦

(天)白蓮へ夫婦の批評掛け離れ

(軸)折れて来るだらう二人はさか

清宵

新水

眠聲

繡浪

鎌月

鳴穂堂

同 笛

同 坊

同 源

同 映紫朗

同 濁水

同 録郎

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

お詫びいたします。今後は大いに注意いたします。

新刊紹介

明治史料(一) 外骨氏編纂

江戸時代の研究よりも、明治時代の研究の方が面白いといふ感が近年予の頭腦に浮んで来た。編纂者外骨氏はその例言に於て述べてゐる。

本書の材料は古い新聞雜誌の記事を主とし、次に書寫本、手紙、公刊の圖書、摺物等から採集され、その範圍は政治、法律、經濟、宗教、文學、教育、藝術、醫學、衛生、交通、産業、軍事、傳記、風俗、異變、雜事等あらゆる方面のものを採集してある。その内容については外骨氏でなければと思ふものも多くを占んでゐる。明治研究といふも、明治廿年ごろまでのものである。外骨氏はことわつてゐられるが、興味の深い記事の多いものところまでであるとのことであるから明治時代の研究者には是非一本をおすめしたい。

昭和二年十月十日發行。菊版和本一二〇頁定價金貳圓五拾錢。發行所は東京市本郷區向岡彌生町二番地半狂堂。

古句質疑

蛭子省二



質疑小規

(一)質疑は古句に限ること。なるべく古句の出所を書添はて置くこと。(二)質疑ははがきで一人一回一間のこと。(三)質疑のはがきには住所姓名を明記すること、但し誌上の匿名は差支なし(四)一度答へた句、末番の句等については答へない。(五)質疑應答は必ずしも先着順ではない研究の餘地ある句は次號廻はしとする。質疑幅帳の場合も又同じ。(六)質疑は必ず本社宛のい。

松櫻和漢古今の宿を貸し

質疑者 春秋 生朝鮮)

此の句は「松櫻和漢晝夜の宿を貸し」にあつた様に、記憶も致しますが和は平忠度で平家物語、源平盛衰記の参照を要します。諺にも古名短冊忠度、即ち「忠度」なる曲がある。忠盛の六男に生れ歌道に長じ、平家没落のおり、夜半其師俊成を訪ふて一歌を千載集に加はられむ事を望むだ。六彌太に討ちさられた時に、籠の内から

行きくれて木の下蔭を宿させば

花や今宵のあるじならまし

の歌が巻物に書いてあつた「宿を貸し」はこれである。諺には。

ワキ 如何に尉殿、はや日の暮れて候へば、一夜の宿を御かし候へ。シテ

うたてやな此花の陰ほごの御宿の候ふべきか、ワキ 實に、是は花の宿なれどもさりながら、誰を主と定むべき

シテの言葉になつて、歌が記してある。後シテ 愧づかしや亡き跡に、姿を歸す夢の中覺むる心はいにしへに、迷ふ雨

夜の物語、申さん爲めに魂魄に。うつりかはりて来りたり。さなきだに妄執多き娑婆なるに、何中々の千載集の歌の品には入りたれど、勅勘の身の悲しさは、讀人知らず書かれし事、妄執の第一なり

詠み人知らずで忠度の名が高し

山櫻讀人知らぬものはなし

これは「さびなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」の歌の事で。千載集の撰定は文治であるから、平家滅亡の間近でもあり憚りて忠度の名を省いたのである。

漢の松は始皇帝の故事で

笠合羽成陽宮をかつき出し
夕立に懲り三百里家をたて
松が大きくつた頃傘がくる
松の木へ遠く下官はぬれて

史記の始皇本紀「始皇東行郡縣、乃遂上泰山、立石封祠祀、下風雨暴至、休於樹下、因封其樹、爲五大夫、卽ち五太夫は松の異名である。

因に三百里は、杜牧之の阿房宮賦に「文王畢四海一蜀、山兀阿房出、覆壓三百餘里、隔離天日……函谷舉、楚人一炬、可憐焦土也。

三百里餅をふらせる始皇帝
三百里家をたて、も雨にぬれ
源平盛衰記に、「礮の築地を高くつきたれば、雁の來り歸る事もかなはざりければ、築地の中に雁門を、穴を明けたり始皇帝雁をさらまへさうにする

始皇帝が儒者を坑にした句は、實に澤山咏まれてゐる。

秦の儒者命なる哉、坑でいひ

「四百六十四人皆坑之咸陽」さあるが、これらの坑に就ては世人が餘り研究をしない様である、伊東博士は、支那陝西省

臨潼縣の國道に程近く儒坑がある。秦の始皇帝が儒者を生き埋めにした坑だ云ふが、實は雨水の爲に侵蝕されて自然に出來た陷凹であり、周圍が絶壁をなして居るから、一度この中へ落れば上れない河南陝西地方には此の種の陷凹が處々にある。此の方法なら千人でも二千人でもわけないのである。

許由はすて竹芝は戀しがり

質疑者 荒木 冬石(千葉)

私の不審帳にも載つて居る句ですから、馱勢解を記して、お互に研究を續けましよう。許由は蒙古にもある通り、箕山に住み、一瓢を持つて水を汲む、樹枝にかけて置けば、風が吹いて鳴らすので煩さして、擲ちて去る。

ひやうたんをうつちやる胸に何もなし
竹芝は竹柴寺舊址の故事でなからうか
更級日記に。

今は武藏國になりぬ、……是は古竹柴といふさかなり。國の人のありけるを火焚家の火焚衛士にさし奉りたりけるに御前の庭を掃くまで。なきや苦しきめを

みるらん、我國に七つ三つ造り居たる酒壺に、さし渡したるひたねの瓢の、南風吹は北に靡き、北風吹は南になびき西吹ば東に靡き東吹ば西になびくを見て、かくてあるよ、獨ごちつぶやきけるを。其時の帝の御ひすめ、いみじうかしづかれたまふ。たゞ獨御簾の際に立出給ひて柱に寄りかゝりて御覽するに、このをのこかく獨ごつを、いみじういかなる瓢のいかに靡ならんさいみじう床しくおほされければ御簾を押し明けて、あのをのこちよれよ、めしければ、かしこまりて高欄のつらに參りたりければ云つる事今ひさかへり、我にいひて聞かせよ、仰せられければ、酒壺の事今ひさかへり申しければ、我るて行て見せよ、さいふやうあり、仰られければ、かしこく恐ろしと思ひたれさるべきにやありけん、おひたてまつりて下るに便なく人追來らんと思ひて、其夜勢多の橋のもきに此宮を居たてまつりて、瀬田の橋をひさまばかりこぼちて、夫を飛越て此宮をかきおひ奉りて、七日七夜さいふに武藏國にいきつきにけり云々。



遠眼鏡の見料

喜田飯山

本誌十月號所載木村半文錢氏の「パイ
ドロミギヤマン(中)」に柳樽初篇の「こ
そぐつて早くうげさる遠眼鏡」の時代に
は既に見料を取つて一般民衆に觀覽せし
めたことは略推察される。一九の
東海道中膝栗毛八編上(大坂見物)に、遠
眼鏡の言ひ立て「サア、見なされ、
大坂の町々蟻の這ふまで見渡る(中略)
只の四文では見るがお徳じや、千里一目
の遠眼鏡これじやく、」とあるから當時
大坂における遠眼鏡の見料は四文であつ

たことがわかる。尤も柳樽初篇の出たの
は明和二年一四二五であり東海道中
膝栗毛八編(上中下三册)の出たのは文化
六年一四六九であるから四十餘年前
の大江戸における遠眼鏡の見料は一寸私
にはいくらであつたかわかりかねるが、
見料を徴してゐたであらうことは半文錢
氏同様略推察される。

鳴り皮

岩本素人

漫 畫

川柳をやる人ばかりではなく誰れでも
が「一寸漫畫の一つも描けたら面白から
うと思ふので稽古がしたいが何うしたら
よいか」なご、よく聞く事であるが、之
れは至極難問題である。斯う言ふ時僕は
返答に困るからいつも「何でもかまわな
いから描いて見る事です」言つて置く
自分ですへ不得要領な返事であるから聞
く方では「さうですか？」甚だたよりの

い。てんで見當が取れぬのであらう。言
つてる方でも實は見當が取れてゐないの
である。僕も「一寸漫畫が描けたら」こ
は常に希ふ所であるが、其「一寸」が一
寸どころか中々むつかしいので今以て「
一寸漫畫」が描けないので弱りぬいてゐ
る。

丸を一つ描く、其中へ眉、目、鼻、口
を描く、耳のあるあたりから左右兩方へ
一本宛棒が出る、其端へ三四本の松葉が
く、付く、これが手である。次には、丸
の下へ二本の縦線が引かれる、大人は「
首だなア」思つてゐる、其先へ「鶏」の足
の様なものが出来る、これ即ち脚である
お互に小供の頃は有望な漫畫家であつた
のである。

大人に成るに随つて、目が片一方小さ
いさか、足がさうの手の指がさうのさ、
つまらない事斗り氣にする様になる。ひ
さいのなるに骨格がいけないの墨色が

悪いのこ、段々ほけ、来る、何處迄馬鹿になつて行くのか底が知れない「大抵もには限度があるものだが人間の馬鹿さ加減は限りがない」ミアルツイパーシエフと言ふ馬鹿が言つてゐる。全く大人言ふ人種程度し難いものはない。これらで「一寸漫書」だから見當の取り難いのに不思議はない。須からく童心に歸るべしである。せめて眼丈けなりこも小供の眼に歸らなくては、本當にものが見へない。本當にものが見へなくては本當にものがかけない。漫書は出来ない。畫の内で漫書丈けが本當の畫だからである。老眼鏡を外して童眼鏡をかけろである。餅米のすしは有難迷惑。ミ素人と言ふ馬鹿が白す。

酒

子役の事を「木瓜」言ふさうである。大きく成る程値段が下るからであらう。ニキビの出る頃に成るミ子役も出来ず、

さりきて親役にはまだ早し、その芝居にも力彌の役がある譯でないから一寸はめ口に困る。だから需要ミ供給の經濟原理に支配されて市價の下落を見るのである。そこで木瓜ミ稱へられる。しかし此の木瓜青年はやがて復「大根」も出世する望みはあるが、こゝに一本の僕ミ言ふ木瓜がある。今は早「へボ木瓜」ミなつて、伸びる丈伸び、ぶく／＼に眼れ上り少しも緊りがない。茶褐色を帯び之れをいたちミなづく。

これでもはしり時代は神童ミも言はれ（これははら）ざくざくたる氣概もあつたが、いかにせん今や既にへほミなり終り賤の小田巻むし返してもお代りを食つても、昔を今にするよしもないのである。

豈淋しからずや。

子役は大根ミ變じふろふきミなり。素人はいたちミ化けてあんかけミ成る。だから酒を呑むのである。酒を呑めば

たまにははしりの香がさかんに幽かなながらも残つてゐるのを感じる事もありさうなのである。

僕の酒は我を忘れる爲ではなく、自己を、本當の自分を取り戻したいから呑むのである。ふるふきやあんかけでは飲めない、小指程の木瓜で呑みたい。あいの香りのやつ。(昭和二〇・一〇・十七)

仙境層雲峽

富士の鞍馬

旭川で落合つた三人、上川行の列車に乗込む。三人共初めての事にて、三時間かゝるに不安な顔を見せ下る。驛毎に十分以上の停車にはボツ／＼不平が出て来た。上川の手前にアンタロマミいふ驛がある。驛まで馬鹿にしてやがるアンタロマ。

先發の三人は二三日前から層雲峽へ行つてゐるのである。後になつた三人は不平云ひ／＼上川驛に電燈の點く頃下ろさ

れた。幸に自動車が待つてゐてくれたのですぐそれに乗る。すぐ走り出した。上川から六里の山道に運轉手にきかされて又不平を並べる。

北海道の秋の夜風、殊に山峽の風は冷たい、薄着の三人はふるゐてる。闇黒の山道をヘットライトの光る限りしか見ぬまゝ疾走する、暗いから危険な崖は気づかぬが、箱根の斷崖を想像して心のうちもふるゐてる。

半分程来たと思ふところで二十間程向ふに男が手をひろげて止まれよ叫んでるのに驚いた。何だと思つたら薪を積んでる馬車、道が狭いので行違ひが困難だからさうしても徐に横へ避けて自動車を通さねばならないのである。ところが山間の馬はヘットライトに驚いてハネ上る。仕方ないから消燈してしばし眞暗の山中に何分間か止つて漸く馬車は行違つた。益々山が深くなる程寒さは身に沁む。

もう三人共聲も出なくなつて走つてる、やつこのこで目的の登仙閣の門へ辿りついた、先着の連中が夕食のすむこであつた。三人共口を揃へて不平を並べて温泉にザンブミ飛込む。

第一に眼についたのはランプを點してゐるこであつた。そして近所に一軒も人家らしい灯が見ぬ。湯から上つて膳につく。先着連は飲み直しさいふ事で、一同盃を重ねて蕃聲連發草臥れて寝る。

夜中に眼があくミランプの瓦斯が室内をこめて臭気が鼻をつき咽喉へこたへるので窓を明けて燈を消した、十何年振にランプ氣分を味はつた、なつかしい氣もする。

一同早朝起床、簡単に名勝ニ稱する所々を廻る。溪は石狩川の上流であつて、温泉は所々に湧出て、溪谷の雄大はないが、岩石の耶馬溪以上なるこをうなづかせる、曰く九十九瀧曰く鳥帽子岩曰く

何の湯もそれ／＼名がついてゐる、前夜不平の三人、いゝね仲間いゝ！

登仙閣の外に少し前から一寸離れたところに層雲閣といふのがある、此處ではそれつきりでありは奥への道路、工事の土工達が簡単な長屋を拵へて住んでゐる丈けである。時々ダイナマイトの爆音がきこ

わる、日々奥へ道が延びてゆくのである。大雪山の登山口であるので旭川營林區署の色々な揭示がある、先着の三人は吾々が着く日朝から登山したのであつた。

七千二百尺の黒岳へ登り桂月岳を廻つて高山氣分を味はつて、熊の足跡に青くなつたり、ラツバ飲みで赤くなつたりして足腰を痛めて来た。

あかるいうちに沿道の景色を見やうと五時一行は登仙閣を出立、自動車から昨夜ふるへて通つた道を作る、沿道三里位の間奇巖連り、溪谷にそび又林に入り、雲のかゝつた黒岳を遙に見て山峽をだん

く離れた。此邊郵便其他の用事一切を此の乗合自動車とその役をつさめる。途中色々の用事を引受けて上川へ向ふ、上川へ着いた時はもう日が暮てゐた、そして往路不平を云ひ、來た汽車も歸りは笑ひ、旭川へ着いた。

私はその後の部の三人の一人であつた旭川で五人ミわかれ函館に向つた。湯の川温泉に一泊東京へ直行上野の改札を出たのは五日目の朝、湯の川の一泊は別に書くこともない。しかし湯の川藝者百四十人居るここは調査済。

— 厚雲 映 —

厚雲映リツクサツクに二人あひ爆音に新名勝へ道が出来來せ、らぎの其處からお湯が湧いて貸下駄で一ト廻りして足がむけ

森の家君の句境

安川久流美

『川柳人』の一八〇號丁卯秋集に、畏友森田二君の六句を久しぶりに見た。

よんで私の頭に(現在響いた句だけ)を抜いて君の近況を評して見やう。

白骨を隣り合つてゐる資本主義

森田君得意の思想である。私がいつか

成金よ汝も地下に眠る人

いふ句を吐いた。それと同じ出發點の

句だ。然し『資本主義』とした所が、森

田君の個性に適つた文字である。しかし

この句は現在の時世を批評したものか

うか疑はしい。

氣をつけてゐるさ蹴られるビール樽

中根新太郎のブルジョアに扮した映畫を

見てゐるやうだ。このビール樽を蹴つて

見たいのが瘦た森田君だらう、呵々。

ボンチ語になつて大臣残される

これは訂正して頂戴した。原句(〇印が

ブルジョア)(十月五日)

一讀即感

西原柳雨

朝飯を母の後に食ひに出る
久流美氏の朝歸りの息子説賛成、弊著『

吉原吉)にも息子の條下に入れて置いた句である。路耶氏の里歸りの花嫁さいふ御説は朝飯の朝さいふ文字を無視した解かと思ふ。又婚禮の翠朝の花嫁さいふ説も聞いたが、姑のこころを母さいふつた用例を知らぬ。

御自分も拙者も逃げた人数也

此句に某氏から打人後の吉良家三具體的に解してゐるゝを見たが成程夫も一解と思ふ。

びいぎろの左右藥罐と藥罐也

半文錢氏の『びいぎろぎやまん』御精査の點敬服致しました。その中に此句は

和歌三神を詠んだ句ではありませんか。

生業の古川柳

風俗史料としての古句研究の上にて於て結構な事と思ふが唯年代の記入なきは非常に遺憾に思ふ。

三人の亡友

庄萬よし

大臣になれぬ事だけわかつたり 路耶

下積のまゝに不惑の面白ろさ。同日からでも真ッ裸になつて不毛の林野をも掘り起す勇氣はある積りでも、不惑を過ぎてからは、空想を引き去つた自分の力量も略自覺が出来ると、世間様へ差し上げる自分の仕事も見定めがつくまいふもの、そこが下積のまゝの面白さ、降り續く雨の日なきには、舊ひ友達の懐かしさ、出来ることなら今から飛んで行つて心ゆく迄話したい氣が起る。

今書く三人の亡友は三様の關係で、いつも私の心に生きてゐる人々である。

竹馬の友引木牧太君

牧太君は私の竹馬の友のうちで一番温厚で可愛らしくて、利發な子供であつた。叔父の家を中にした隣の一人兒牧太君は兩親の眼に這入つても痛くない可愛坊で誰さでもすぐ喧嘩する私の短氣が君さだけ性が合ふて時には朝から晩まで二人一緒に遊んで一度も争ふたことはなかつた。牧太君のお母さんが一合程炊ける赤の釜

で玉子飯の御馳走を二人に毎日拵へてくれた。夏になるに二人は二里程上から流れて來てる前の小川で、雑魚を追ひ廻したり、泳ぎの稽古をしたりするのが日課であつた。淵さいふても三尺にも足らぬ小川はまだ學齡にならぬ二人にも危険でなかつた。河原の端に干越の用意の四坪位の用水池が掘られた。小學校へ行つてる大きな子供はこの深い用水へ飛び込んで泳ぎの秘術を見せて二人を羨ませた。

或る日、上杉源吉君さいふも一つ年上の連れに三人で静かな用水池の青い水面を見てゐるうちに自分等にも泳げるらしい氣分が湧いて來た。小さな三ツの魂が一致して大きな子供がやる勇敢な冒險を決定することゝなつた。年長の上杉源吉君と吾が牧太君が先に飛び込んだ。年少の私には腹巻の紐がさうしても解けないので二人の冒險を見てゐるばかりであつた。小川での自信のある水泳の技量も

十尺にあまる池では何等の權威もなかつた。二人は水底深く沈んだまゝ遂に浮んで來なかつた。一町程ある私の家へ報告に歸つた頃は完全に溺れてしまつたのでした。牛にのせたり藁火に温めたりして寅吉は泣き出したが吾が牧太君は永遠に泣聲を出さなつた。私が五ツで牧太君は六つであつた。

好敵手松田松助君

谷田君は村長の三男で、高等小學を終るまで八年の間喧嘩でも成績でも私の好敵手であつたが親密さいふ程でもなかつた。それは色々な點で正反對の性格のためでもあつた。君は脊の高い貴公子風で、私はチビで茶目坊であつた。君は體裁家で私は腕白者であつた。君は音楽の圖畫が好きで私は數學に相撲が好きであつた。君の泣き方は自然にワー、ハーと聲を揚げてすぐ止む方であつたが、私の泣き方は我慢出来るだけ耐へて、爆發しやうものなら一時間でも二時間でも泣き

續ける方であつた。中學も龍野の神戸ミへ別れて入つてから休暇になるに二ツの相反した性格の持主の語り合ふ日が續いた一纏に無銭旅行をしたり討論會を開いたり、幻燈で講習會をやつたり、修養だとか世の中だとかの話しもすれば、初戀らしい気分も分りかける。もう相反する性格を御互に許し合ふし近親に言へぬ話もした。中學四年の夏、君は正しく初戀にさらわれた。相手は山崎藩士のYさいふ、村の助教をしてる十六歳の利發な才媛であつた。私か文通の仲宿さいふ事にして、可なりな眞剣さを以て意思の郵便が往復して君が三高へ行つた年、Y女は美しい戀を抱いて死んだ。君からは新墓へ詣でたさいふ通知もあつた。

爾後五年、君が農學士になつて京都煙草專賣局の某課長として始めて社會に立つた年の春、もう一人の父になつてゐたのに一通の書置きもなく山科驛近くで轢死をした。丁度Y女が死んでから五年目の同じ日であつた。

負け嫌ひな高尾武郎君

その頃神中の私のクラスの首席は、今朝鮮總督官房に居る山本法學士で、君はいつも二番であつた。住友の總務部長をしてゐる野草君や、日本絹綿の專務官野君や津田海軍大佐や白鶴本家の嘉納君やても成績では君に及ばなかつた。記憶のよい君は西洋史で百二十點を貰ふたことがある、要するに滿點以上であつた。君は自分の周圍の誰にも負けるのが嫌ひで當時私共同級五人で自炊をしてゐた。自炊組の一人でも勉強してゐるものがある。自分機を離れず何か讀書をして居た。八犬傳、水滸傳、三國誌等は三四回も繰返してゐた。中學を出た年入營するに三九の志願兵中尉右翼で任官した。奉天戰後鐵嶺附近まで出征して勳六に四百圓が下賜せられた。除隊後君は競争の相手を探してゐた頃、ふとした機會から故村藍那で自分より金持ちがK一人あることを見付けた。これからK以上に蓄財するために數年の努力が續けられ君の性格は金、金のために貴一流に一變した。或る夏の炎大續きに農村には雨乞ひの炬火

や願が行はれた。藍那村の氏宮でも雨乞ひの徹夜祈禱が一週間決行せられた。各戸一人參詣の規定で事故あるものは一夜二十錢を徵集せられた。君は如何してか參詣もせず徵集金にも應じなかつた。論理は痛快である。曰く、祈禱で雨は降るものでない。よし降雨があつた處で貰ふ小作料は規定だけである。降雨少くして米價が高ければ地主の利益である。裁判に掛けても一圓四十錢は仕拂ふ義務はな

い。頑として應ぜなかつた。

君の様な意志の強い男が思案の外の人局にかゝつた。相手は三人の手持の中

年増であつた。筋書通り本夫から一萬圓を要求して來た。君は姦通罪が成立しても宜いから金は出さぬと頑張つた。交渉數句一萬圓の要求を二百圓で片付けた。爾今本問題につき彼是文句は申間敷といふ一札を取つた。

丁度君がKの財産を抜いて村一番の物持になつた秋、一人兒が庭の池で溺死をして間もなく君も脚氣で後を追ふた。三十には一二年間があつた。今日まで生

きて居たら小さな乾新兵衛位になつてゐるだらうと思ふ。

東奥の佛都 (二)

平泉中尊寺

三井與之助

中尊寺に見るべきものは、金色堂、經藏、辨財天堂、寶庫、千手堂、閼伽堂、大日堂其他である。

金色堂

は清衡が自己の遺骸を存置すべく最も力を盡して造營した、所謂墓標建築である。次で基衡、秀衡も之に倣らつて遺骸を納めしめたもので、方三間の單層寶形造である。建立後百六十餘年の正應元年、鎌倉將軍康親王の命で、套堂を建てた爲め、全形を見る事は出来ないが、此套堂の爲に、之丈の國寶的美術が遺つたので、有がたい譯である。建築は二軒、三斗組、何れも當時の特色を示して居る、殊に股を開いた採り拔式の本臺股は、此種の最古の例として貴重なものである。中央一間を内陣として、

天井は外陣は化粧屋根裏、内陣は折上小組格天井で、之等もよく時代の推移が窺はれる。内外四壁總して金箔を貼り、内陣の四本柱は所謂七寶壯嚴卷柱と稱し、鍍金青銅の箍、螺鈿、蒔繪、金具等で飾り俗に十二光佛と稱する、胎藏界大日妙來像十二體づゝ描かれある。柱及斗拱、長押、高欄等總して平目的地の上に螺鈿、金銅透彫の金具を附し、金銀珠玉を鏤めてある。今は金色失せ剥落もひびが、想ふに創建當時此の結構の絢爛、精巧は時人を驚歎せしめた事であらう。

堂内三壇の須彌壇を構ひ、各彌陀、觀音、勢至の三尊、多聞持剣の二天及び六地藏尊を安置し、中央壇下に清衡、左に基衡、右に秀衡の遺骸を納められてある而して之等の佛像は何れも夫々年代を語る優秀な作である。又須彌壇の格狭間の孔雀ニ瑞花ミを半肉に打抜きたる銅版の構目の雄麗、意匠の卓拔、配置の妙等正に當代藝術の莊重、品位、優雅を語る代表的である。只明治三十年の大修理の際、實利本位の設備は聊か美觀を殺いだ感が

あるのは遺憾である。之を要するに金色堂は其建築的價値は兎に角、内部の結構と、裝飾的工藝美術を而して其保存の程度に於て、當代遺物中優に宇治の鳳凰堂、豊後富貴寺以上に優秀にして貴重なるものである。

經藏 方三間、單層、寶形造棧瓦葺の建築で外觀頗る粗野のものである。元二階建が延元二年の山火に二階以上が焼けたのを修築され、其後幾度も補修を受けたるも、其四壁は創建當時のもので剥落の度はひどいが、辛うじて雲縹彩色の痕を存じ、當時の華麗の程を窺ひ得る。初め清衡金銀泥一切經を納め、基衡紺紙金泥一切經、秀衡宋版一切經を奉納し大半が遺つて居る。裝幀華麗を極め、卷頭の經説を描ける繪畫は、優雅にして自在なる趣致、大和繪發達史の先驅をなすもので、繪畫史上にも貴重のものである。其他堂内什器中、螺鈿八角須彌壇、禮盤、卓、磬架、經案等澤山の當代藝術上の逸品があり、尙外に創建以來の願文其他の古文書等見るべきものが數々ある。

山上山下

— 本社の松茸狩 —

句 囚 人

一行は奥舟・きよし・松野・森八夫妻・大夫妻・間路・藤井・高よし・かほる・ひろし・飯沼・柳骨・朝陽・二柳子・路那
いつも乗つてゐる南海電車でも舊市街の事務室へ出かける時の気分さ、郊外へ向けて出る時の気分さは違ふ。一歩外へ出るさもう旅のきもちが漲ぎつてくる割烹學校り美しいのが佐野まで同車することになつたので、そろ／＼天井が薄くなりかけたのや白髪交じりの叔父さん達を嬉れしがらせた。一行がすらりこ並んでゐる向い側へ美しいお嬢さん達が遠慮氣もなく一行にお尻を向けて釣革へぶらさがつた友禪模様のウキンドを眺めてゐるやうでもあり、さながら秋の野邊を逍遙するやうでもあり美しいには違ひないが、なんぞなく物足らぬやうでもある。發車間際にドヤ／＼と押し込んで來て、我等松茸狩一行の前にズラりと並んだのは市岡中學の坊っちゃん達だ。親のすれをかぢりながら軍國主義の稽古に出かけ

るころだ。寒むさうな白いズボンをはいてゐるのが眼立つた拂ひ下げの鐵砲をうれしそうにいさゝか重たさうにさげてるいづれも東京れぎのやうにすら

うに軍國主義をのろつた。しかし、この小さな兵隊さん達も兵隊のイミテーションにまんざらお嬢さん達と同車することゝ厭つてはゐないやうだつた。



松茸 五

りさやせかけて脊が高い。それがためにせめてものよるこびであつたウキンドの友禪模様すら見られなくなつた松茸狩に戒嚴令を布いた観がある。今更のや

いや厭つてゐないばかりか、少なからず心を躍らせてゐたらしい。私はこの可愛い兵隊さんが市岡中學だと知るさ死んだ六厘坊のこゝを考へた。二科の小出

楡重君のこゝを考へた。服部ふくべ君や川上日車君や木谷ひさご君のこゝを思つた。そして、昔の市岡中學の光景を思ひ／＼かべてゐた。その人達が／＼くま通つてゐたころの市岡中學は田圃の中の一軒家だつた。こんなこゝを考へてゐるうちにいつしか濱寺をすぎ、佐野來てゐたこゝで乗りかへて鳥取の莊で下車した。一同勢揃ひに及んで中年増の仲居さんにいさゝかのうるほひを感じながら山へ登つた山にはついでが、最早かくべき紙面がなさうだ。少しく速度を早めればなるまい山は松茸の匂ひ、松の匂ひ、空の匂ひ、遙か眼下の海の匂ひで充ち／＼してゐた。私達は存分に童心に歸つた松茸はあまりに多くて失望させた位であるから、松茸のこゝは事にするかかない。兼題は出したが誰も句を作らうとさしなないもつと燃焼させてからさいふ積つてあらう。歡びは酒に極はまつて一行は三時ごろに山を下つた。未だ日は高い。歸りをいそぐ二三の人達をのぞいて一行は貝塚へ下車した。昔ながらの柔い情緒が漂つてゐるところであ

罐詰で淋しい宵を酔うて寝る
 ざれ貸して見なご罐詰切つてやり
 煮られたご罐詰 寸見ぬねなり
 罐詰はやもめが 煮いた味の様
 友達を訪へば 罐詰など並べ
 罐詰に亭主は 足ご手ご使ひ
 罐詰を開けるに 隣まで走り
 茶算笥のすみに 罐詰置き忘れ
 罐詰へごつかご 坐る置山隊
 罐詰は半分あけて つまぐなり
 (佳)罐詰を泣くく 受ける樞英氏
 罐詰を童貞さ 云ふ顔で開け
 罐詰を切る病人の 手がふるへ
 罐詰の空が 轉るいゝ眺め
 罐詰を開けるに 二つ顔が寄り
 要するに罐詰だけの 味ご知り
 (軸)罐詰を眺へた方も 集つて来る
 席題 「バルコニー」 互

冷笑 住山 炭車 かほる 英豆 馬行 蒼梧樓 同 翠峰 同 白水 同 かほる 鮎美 住山 蒼梧樓 荳 萬よし 選 加香 五六八 狸山 炭車 新水 白水 冷水 石竹 若梧樓 鮎美 佳山 翠峰 源坊

眼をそらす斗り露臺の二人きり
 バルコニー下は地獄のやうに見ゆ
 バルコニー向ひの窓は事務を取り
 約束に少し遅れてバルコニー
 バルコニー愛人優しいこを見せ
 バルコニーレターを讀むに風が
 バルコニーいつまなした下を見る
 バルコニーさり残された月が射し

川柳 螢ヶ池支部句會 (大阪)
 雜誌社 安西杏三報

十月八日折からの雨を冒して御出席下さ
 つた二柳子、萬よし馬行の三先生を圍んで作
 句三昧に入りました。

鯛 (兼題) 萬よし 選

板臺が乾いて鯛も賣残り 一立
 焼鯛(毒見する様に)堀止まり 葎舟
 婚禮の折のすきより鯛のぞき 谷師
 さびれてるさかな屋鯛(日)が 紫海
 榮養の表には鯛も値打なし 壽形
 朝十時すし屋の前は鯛のあら 壽麿
 車屋が「名代」で来る笹の鯛 寒耶
 小さうても心を贈る眞鯛なり 同
 一ト切れが若干につく鯛の味 村奉行
 この鯛で女房冷飯食ふ氣なり 同
 婚禮日長屋に過ぎた鯛が跳ね 藏六
 晝網に小鯛一匹光つてり 同
 嬉しさは鯛一匹に 其象
 肴屋が持ては生きてるレンコ鯛 同
 瀬戸らしい涙のうれりご知つた鯛 聖子

賣聲のるせいに鯛は生きて来る
 路次へ来て小鯛また、く間に賣
 鯛の膳軒に國旗の舞ふ日なり
 釣り籠の鯛(近所)寄つて来る
 色つた鯛ごは知らずはめて居る
 さかな店たすきの鯛は松に降り
 豆細工で鯛ごさにての一年生
 もつたいないご言ひつゝ鯛の
 はびで鯛釣るやうな話振り
 明け方の濱へ鯛網疲れて來
 贅澤と思はず漁師鯛に飽き
 されく鯛(鉢巻)列をなし
 盤臺に鯛が生きてる勇み肌
 腐つても鯛それよりも生きた鯛
 大鯛に生活誇る披露宴
 大鯛が是非要ある日なり菊香
 出征は悲喜こもくの鯛を食べ
 折詰め鯛は無慘に尾を折られ
 線香の煙りに列ぶレンコ鯛
 魚ごまの店半分は籠に跳み
 レンコ鯛包んだ紙が薄く染み
 鮮人の値切る鯛には片目なし
 住 吟
 鯛を釣る戎の顔に變化なく
 荒瀬戸を突切つたらしい鯛の鼻
 鯛買うて来て出獄の友を待ち
 鯛小さけれど嬉しき夕餉にて
 (軸)鯛の鯛はたねるまの誕生日
 レンコ鯛行李一つの嫁を取る
 汽車(兼題) 一柳子 選
 悲辨交々無關心な汽車です 一立

輕便の香氣客は待たされる
 思ひ出の故郷の空を汽車はすき
 尋常科又トンネルだトンネルだ
 汽車走つても走つても春霞
 見ゆる来た汽車に踏切あわて出し
 終列車これで歸るぞ思ひきや
 女の子客になつて汽車こつこ
 ハキトク時間表も知らずにつ
 終列車迄は間が有り飲み交し
 絶景に驛辨膝に置いた儘
 驛賣りの詠り國を越へたらし
 恐ろしい勢ひで三等這入つて来
 ワインドの汽車トンネルを揺り出
 釣つてるへ時たま汽車が運るだけ

蔵 昭 月 杏 鹿 同 壽 同 鹿 杏 月 昭 蔵
 那 形 形 三 村 磨 磨 磨 三 形 那 六
 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行

動物園今日もつれない雨となり
 浮き出した様に五座の灯雨にぬれ
 編物と戯曲集に雨もよし
 俄雨買はない客が急にふに
 (軸)教室に音一つなし雨の畫
 親類(席題) 互
 夫婦仲良しは話でまづい飯
 伯父が行く今日は嬉しい膳につき
 親類へ行くぞ弟かたうなり
 金も出来ず親類で巾着き
 親類の手前もあるを叱り
 あゝあれも親類でさ話すき
 親類と云ふのが庭を掃いてゐる
 叔父らしく言ふ事言ふがしてく
 親類の初衣着近所へ見せ廻り
 親類へ逢はす顔なき顔で逢ひ
 親類の言ふ事丈に迷ふ親
 親類へ一本立ちの意地を見せ
 親類へ遣族は金と引き取られ
 親類が迷惑なさはぬかしたり
 よい時は親類顔でよつて来る
 親類が寄つて倒した事にする

川柳 小松句會 (石川)
 雜誌社
 九月十日 於 柳 亭 本田柳一路報
 仲秋名月の晚風流さ句樂を共にする 柳友は
 金澤より御來駕の久流美先生と十三氏であ
 つた私は不參。

「月」 久流美選
 月を背に二人は村のはづれまで 小波

忘れたる干物かたづけ月を賞め
 月の澄む夜であつたさ書き起し
 ぼう飛んであつたから月をなく
 (秀)居留地の月は故郷を思はせる
 名月へ蚊張の一人が起きて来る
 一線を引いてかべから月が漏り
 (軸)くだを巻く頃は傾く月であり
 思ひ出 金鐵子選
 大雪を思ひ出すほどの暑さなり
 思ひ出の都へ着いて國の事
 思ひ出の丘へ今宵も同じ月
 苦しんだ事も今は語り草
 成金になつて苦勞の日を思ひ
 (秀)思ひ出の種にもなりと筆の跡
 生醉にしてはハツキョウ覺は居り
 留守居番何か思つて一人笑み
 (軸)月を觀て故郷の山を思ひ出し 金鐵子

猫柳同人小集 (石川)
 九月十六日 本田柳一路報
 弟に此兄あつていゝ暮し
 りんしょくの兄に分家は法をかり
 弟の喧嘩相手さ又喧嘩 柳一路
 弟を都へ送る 汽車の窓 智久柳
 兄さんの見はない時にすれて見る
 兄さんへ力をかりに泣いて来る 川柳子

久住 送別句會 (大阪)
 其象氏 川柳雜誌社蟹ヶ池支部
 長い間川柳道に精進されて居られた 其象
 氏が今回全快退所される事となり、九月十八



編輯室から

▼書齋から事務室へ、事務室から書齋へ戻る比較的單調な生活を續けて居る。少しく生活の様式を變へて見たいと思ふ、こもあるが、さしづめしなければならぬ事をしてゐるうちに次の編輯が来るので、それも出来ない。少しづつ、本が讀めるだけでも、未だ有難いと思はなければならぬ。▼本號では藤園が「主婦の杓子權」といふ變つたものを書いた。省二氏の「煙草の古句」は随分根氣のいゝものである。半文錢氏の「ビードロギヤマン」は本號で完結、僕の「累卵の遊び」もあと一回でうち切ることにした。▼近作柳樽欄に多くの佳吟を發表して來た。福田山雨樓を新に本誌の選者に推薦した。前號で一斗書いておいたが、駒人はいよいよ十月八日に華燭の典を擧げた。店先に赤いものがちらくするのはいゝものだ。春のやうな氣分に浸つてゐるこそであらう。▼十月十四日に社の松茸狩をした。同勢十七人、いつもの様に賑やかに出かけた。同行つた。朝陽、柳骨、萬よし、二柳子等の骨折である。▼三笑は年回が當つて郷里金澤へ暫く歸つてゐた。小松支部で大變歓迎されたさうである。川柳によつて繋つた人々の味が味ふ喜びである。▼蛭子省二氏から詩川柳

研究社を設立したといふ通知に接した。箇人雜誌でも出して、氏のうんちくを傾けるのがさうだが。▼日車、半文錢の兩君を中心に「底」が十一月一日に創刊されるさうだ。▼十月中旬に松江から二網君が來阪された。仁川からは右大臣がやつて來たが、何れも商用で、とても忙しいらしいので逢ふ機會がなかつた。不二網君は道頓堀支部へ立ち寄つた。▼歸松され右大臣とは電話で話しただけである。なほ、仁川と大阪は、そんなに遠いところではない。いつでも逢へるんだから、たゞは電話で話し合ふのもいい。▼白水屋で関西漫畫會の第二回漫展が開かれた。素人、松耶、馬行、二柳子その他の諸君等が毎日のやうに出かけて行つたさうだが、僕は忙しかつたので漫展氣分を味ふことが出来なかつた。▼二科が大阪へ來た。相變らず楢重氏のものが光つてゐるさうだ。案内をうけたがまだ行けぬ。▼朝陽は長谷寺へ、舟々は伊勢へ、月二會の人々は苦樂園へ、めだま同人は有馬温泉へ、關西漫畫會の人々は金澤へ、萬よし夫人は靈坂へ、東京きりや吟社の人々は磯部温泉へ、大連の高橋月雨氏は撫順へ、さ足のぼしてゐる。僕は旅の空を思ふばかりである。このいゝ天氣に机の前に坐り込んで筆の勢を續けてゐる。もう少し惠まれてもいいと思ふが、首に紐がついてゐる間はさうのんきに飛んでも歩けぬ。▼滿州川柳社滿州日日新聞社主催の川柳作品展覽會が、十一月月上旬に大連の三越吳服店で開催されるさうであ

るが僕は忙しいので出せるかどうか疑問だ。▼全國川柳展覽會もその第一回を昭和三年一月廿一日から五日間、名古屋松坂屋吳服店で開催するさうである。會員は花岡百樹、渡邊虹衣、食滿南北、坂井久良岐、岸本水府の諸氏、▼遂、川柳會握手記念陸社事務所で開かれるとのこと。▼金澤川柳會では百回記念川柳大會を十一月六日正午から西町佛教青年會館で開催すること。題雜吟三句。▼久住其象君が大阪市南區田島町一番地へ退院して、新しい歡喜に充ちた生活をはじめてゐる。▼螢ヶ池支部會員山田新三郎君は號を新に壽鷹(トシマロ)とよぶことになつた。同支部會員松並光哉君の令聞は郷里岡山縣で一女を遺して亡くなられた。天折ほど傷ましいものはない。▼川柳縁切寺の著者澤田例外氏が十月一日に永眠された。謹しんで悼む。(路)

移 轉・其他

▼檜山千代二君東京市麴町區八重洲町一の一堺和田日五階日本營養協會へ。▼河野春三君堺市花田町二〇二二へ。▼中野柳陽君滿州長春露月町二ノ四〇、二四へ。▼外骨氏東京市本郷區岡岡彌生町二へ。▼河村桃哉君大阪府下池田宇保町二六二へ。▼小川白雪君大阪市西成區南神合町六一五ノ一へ。▼川口川榮坊君根室國標津港本通へ。▼藤原遊二郎氏大阪市南區八幡町二五へ。▼八萬洞繪畫(工藝)を經營▼吉川啞人君山口縣久賀町へ。

投稿規定

- ▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記する(こ)。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記する(こ)。
- ▼締切は厳守されたし。
- ▼各地會報は清記の(こ)。
- ▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。
- ▼投稿其他につき御問合せは必ず返信料封入の(こ)。

募 集

第五卷第一號課題

十一月五日締切。

(各題二十句以内)

- ▼芝居 森 東 魚 選
- ▼辻 小西 兎 絲 子 選
- ▼窓 中野 柳陽 共選
- 橋本 二 柳 子

第五卷第二號課題

十二月五日締切。

(各題二十句以内)

- ▼父 篠 原 春 雨 選
- ▼素人 椋 元 紋 太 選
- ▼定宿 福田 山 雨 樓 共選
- 太田 朝 陽

每 號 募 集

- ▼近作柳樽(卅句以内) 麻生路郎選
- ▼古句質疑 蛭子省二擔當
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價 定

一部 參拾錢
六部 壹圓六拾錢(稅郵)
十二部 參圓(共稅)

料 告 廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和二年十月廿五日印刷

昭和二年十一月一日發行

第四卷第十一號
(毎月一回一日發行)

大阪市西成區千本通五丁目七番地

編輯兼發行印刷人

麻 生 幸 二 郎

發 行 所

大阪市西成區千本通五丁目七番地

振替大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十二番地

川 柳 雜 誌 社 事 務 所

振替大阪七五〇五〇番

店 書 棚 賣

- (大阪) 大賣捌 サクラヤ書房 其他市内各書店
- (東京) 仲見世 玉森堂(神戸) 米田 後藤(函館) 石塚
- (廣島) 廣文館 (石川縣小松) マコト屋 (京都) 畫萬堂

讀書子に告ぐ

今のやうにあこからく新刊が出るに新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こうなればわざと新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にまつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

古書目録

が出来ました。御入用の方に送呈します。
「川柳雜誌」で見たと御書き添へ御請求を願ひます。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

母親も白鶴ならこ一つ受け
恩給も近く白鶴樽で据ゑ



灘 津 攝

釀 社 會 名 合 納 嘉

古本屋漁りの興味と！

古本屋そのもの、面白味を知りたい人は「古本屋」をお読み下さい

古本屋

年五回發行

實費にて頒布

一號賣切二號少數

殘本あり

珍書や絶版書をおさびしになりたい人や古本の價值を知らうこなさる人は「古本屋」をお読み下さい

「古本屋」發行所 荒木伊兵衛書店

大阪市西區江戸堀南通り三丁目

電話土佐堀一四六一番

振替大阪一二八五六番

